

41602

教科書文庫

4
810
41-1938
2000-201815

579
1228

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

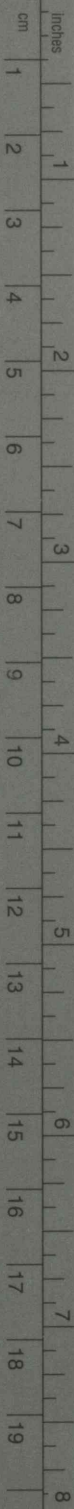


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Ha7
資料室

帝國讀本

改制新版

卷九



文部省檢定濟

昭和三十一年一月十一日 中國語文教科

資料室

375.9
Ha7

帝國讀本

改制新版

文學博士 芳賀矢一 編
文學博士 上田萬年 訂補
文學士 長谷川福平

合資會社 富山房發兌

千早の

神の代

日の本

國の

六

や



池田の宿

松岡映丘筆



帝立
 帝立
 帝立
 帝國讀本
 帝國讀本
 帝國讀本

帝
 帝
 帝國讀本

帝國讀本

帝國讀本 改制新版 卷九

目次

一 詩興	夏目漱石	一
二 春興(朗詠)	本居宣長	七
三 菅笠日記	吉澤義則	一九
四 江戸時代の學者と明治維新	(平家物語)	三
五 國語の變遷	河野省三	四
六 大原御幸	河野省三	四
七 一系の天子(俳句新調)	河野省三	四
八 國學と日本精神その一	河野省三	四
九 國學と日本精神その二	河野省三	四

目次

一

▽〇 新たなる説を出すこと……………本居宣長…六
 新たなる説を出すこと……………六
 新たにいひ出づる説はとみに人の
 うけひかぬこと……………五
 師の説になづまざること……………六
 わがをしへ子に戒めおくやう……………七
 ▽二 みくにまなび……………平田篤胤…七
 逆境の恩寵(自修文)……………加藤玄智…七
 ▽三 御堂關白……………(大鏡)…八
 自覺の徹底……………吉田靜致…八
 世界の四聖……………高山林次郎…八
 石彫獅子の賦(詩)……………薄田泣菫…九
 東下り……………(伊勢物語)…二〇

▽七 月草の花……………(増鏡)…一〇六
 千里が竹……………近松門左衛門…一〇九
 教化上より見た近松(自修文)……………藤村作…二八
 ▽九 落花の雪……………(太平記)…二三
 芳宜園大人の靈を祭る……………村田春海…二六
 三 國文學の精神……………久松潛一…三〇

知 感覺 知覚 記憶
想像 推理 斬定
概念

情 喜怒哀樂 憂
喜 怒 哀 樂 憂

心 思慮 選擇 決行 心的作用



帝國讀本 改制新版 卷九

詩興 夏目漱石

山路を登りながら考へた。行動すは夫歎す。自分の主張 固執
智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈
だ。とかくに人の世は住みにくい。

住みにくさが高ずると、心安い所へ引越したくなる。どこへ越し
ても住みにくいと悟つた時、詩が生れ、畫が出来る。

人の世を作つたものは、神でもなければ、鬼でもない。やはり向ふ
三軒兩隣にちら／＼する唯の人である。唯の人が作つた人の世が
住みにくいからとて、引越す國はあるまい。あれば、人てなしの國へ
行くばかりだ。人てなしの國は、人の世よりもなほ住みにくからう。

(一)小説家。金之助。東名。五十年。大正五年。歿。

神 自然永遠力的人格化

人格の永遠化したもの

鬼 (智情を(自然力)の(鬼))

人の世の(鬼)

詩興

藝術

美的觀念を
具體的に表
現する

過去の意識の
容々の内的
再生するもの

鏗鏘の音

澆季溷濁の俗
界

尺縑

尺縑

越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれ程か
 寛げて、束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。茲に詩人
 といふ天職が出来、茲に畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士
 は、人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に尊い。
 住みにくい世から住みにくい煩を引抜いて、有難い世界をまの
 あたりに寫すのが詩である。畫である。或は音楽、彫刻である。細かに
 言へば、寫さないでも、たゞまのあたりに見れば、其所に詩も生き、歌
 も涌く。著想を紙に落さずとも、鏗鏘の音は胸裏に起り、丹青を畫架
 に向つて塗抹せずとも、五彩の絢爛はおのづから心眼に映る。たゞ
 おのが住む世をかく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗
 界を清く麗かに收め得れば足りる。この故に無聲の詩人には一句
 なく、無色の畫家には尺縑なくとも、かく人生を觀じ得る點に於て、
 かく煩惱を解脱し得る點に於て、かく清淨界に出入し得る點に於

て、我利私慾の羈絆を掃蕩し得る點に於て、あらゆる俗界の寵兒よ
 りも幸福である。

忽ち足の下で雲雀の聲がしだした。谷を見おろしたが、どこで鳴
 いてゐるか影も形も見えぬ。唯聲だけが明らかに聞える。せつせと
 せはしく、絶間なく鳴いてゐる。方幾里の空氣が一面に蚤に刺され
 て、ゐたゞまらないやうな氣がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の餘
 裕もない。長閑な春の日を鳴きつくし、鳴きあかし、また鳴きくらさ
 なければ氣が濟まぬと見える。その上どこまでも登つて行く。いつ
 までも登つて行く。雲雀はきつと雲の上で死ぬに相違ない。登り詰
 めた擧句は、流れて雲に入つて漂うてゐるうちに、形は消えてなく
 なつて、唯聲だけが空のうちに残るのかも知れない。

横を見下すと、菜の花が一面に見える。雲雀はあすこへ落ちるの
 かと思つた。否、あの黄金の原から飛上つて來るのかと思つた。次に

*we look before and after
and give for what we want
our sincerest laughter
with some pain in freight
our sweetest songs we those
that still of saddest thought*

(一)イギリスの詩人。(西紀一七九二年)一七八二年
(二)雲雀に寄する賦。

は、落ちる雲雀と上る雲雀とが、十文字にすれ違ふのかと思つた。最後に、落ちる時も、上る時も、また十文字にすれ違ふ時も、元氣よく鳴き續けるだらうと思つた。

春は眠くなる。猫は鼠を捕る事を忘れ、人間は借金のある事を忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて、正體がなくなる。唯菜の花を遠く望んだ時に眼が醒める。雲雀の聲を聞いた時に魂の在所が判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない。魂全體が鳴くのだ。魂の活動が聲に現れた物のうちで、あれ程元氣のある物はない。ああ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。

忽ち^(一)シェリーの^(二)雲雀の詩を思ひ出して、口の中で覺えた所だけ暗誦してみたが、覺えてゐる所は二三句しかなつた。

前を見ては、しりへを見ては、物ほしとあこがるゝかな、われ。腹からの笑と言へど、苦しみのそこにあるべし。美しき極みの歌に、悲

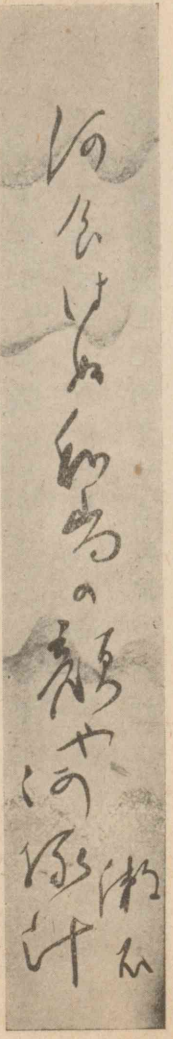
しさの極みの想、籠るとぞ知れ。

成程、いくら詩人が幸福でも、あの雲雀のやうに、思ひ切つて前後を忘却して、一心不亂に我が喜を歌ふ譯にはゆくまい。

西洋の詩は無論の事、支那の詩にも、よく萬斛の愁などといふ辭がある。詩人に憂は附物かも知れないが、あの雲雀を聞く心持にな

萬斛の愁
甚る
非^レ多^クの

何食はぬ和
尙の顔や河
豚汁
漱石



蹟筆石漱目夏

れば、微塵の苦もない。菜の花を見ても、たゞ嬉しくて胸が躍るばかりだ。かう山の中に来て、自然の景物に接すれば、見る物も聞く物も面白い。面白いだけで、別段苦しみも起らぬ。

苦しみのないのは何故であらう。たゞこの景色を一幅の畫として観、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地

醇乎として醇

面をもらつて開拓する氣にもならねば、鐵道を架けて一儲する料簡も起らぬ。たゞこの腹の足しにもならぬ景色が、景色としてのみ余が心を楽しませるから、苦勞も心配も伴なはぬのであらう。自然の力は是に於てか尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇乎として醇なる詩境に入らしめるのは自然である。

解脱

苦しんだり、怒つたり、騒いだり、泣いたりするのは、人の世に附物だ。余の欲する詩は、そんな世間的の人情を鼓舞するやうなものではない。俗念を放棄して、暫くでも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも、人情を離れた芝居はない。理非を絶した小説は少からう。どこまでも世間を出る事の出来ぬのがその特色である。殊に西洋の詩になると、人事が根本になるから、いはゆる詩歌の純粹なものも、この境を解脱する事を知らぬ。嬉しい事に、東洋の詩歌には、其所を解脱したのがある。

(一)晉の處士陶淵明の詩「飲酒」二十首の中の第五
(二)唐の詩人王維の詩

別乾坤

探菊東籬下、悠然見南山。
たゞそれぎりの中に、暑苦しい世の中をまるで忘れた光景が出て来る。超然と世間的に利害損得の汗を流し去つた心持になれる。
獨坐幽篁裏、彈琴復長嘯。
深林人不知、明月來相照。

草枕

趣味、夫、対象ヲ理解シテ之ヲ批判スル能カ、美シク吟詠スル也。

(三)唐の詩人。字は夢得。會昌四年(西紀八七一年)といふ。

二 春 興

野草芳菲紅錦地、遊絲繚亂碧羅天。
劉禹錫
櫻かざしてけふもくらしつ、山部赤人

二 春 興

七

威儀性に定んやある。花を先に行くー

春夜

踏花同惜少年春

白居易

はるの夜の闇はあやなし梅の花

凡河内躬恆

納涼

池冷水無三伏夏

源英明

女はたくはる水に秋こそ通ふらし

中務

杜鵑

一聲山鳥曙雲外

許渾

さつきやみおほつかなきを杜鵑

明日香王子

ゆきやらで山路くらしつ杜鵑

(一)平安時代の歌人天曆二年(六〇八年)歿年六十。

いま一聲のきかまほしさに

源公忠

八月十五夜

三五夜中新月色

白居易

十二廻中無勝於此夕之好

紀長谷雄

千萬里外皆争於吾家之光

源順

雪

雪似鷺毛飛散亂

白居易

雪ふれば木ごとに花ぞ咲きにける

紀友則

いづれを梅とわきて折らまし

餞別

(二)平安時代の文門菅原道真(延喜五年一五七二)歿年六十八。
(三)平安時代の歌人永觀(永觀元年一〇六四)歿年七十三。

(一)平安時代の文多天皇の皇子(天曆二年一〇一〇)歿年九十九。
(二)平安時代の宮女多天皇の皇女(天曆二年一〇一〇)歿年九十九。
(三)唐の詩人字は用晦。

(一)平安時代の儒者書家。第六十二代村上天皇に仕へた。天徳元年(一〇七一年)歿。
(二)平安時代の儒者。第六十三代冷泉天皇に仕へた。

(三)江戸時代の學者。伊勢の人。鈴屋と號した。享和元年(一八〇一年)歿。
(四)明和九年(一七九二年)三月。

前途程遠馳思於雁山之暮雲
後會期遙霽纓於鴻臚之曉淚
大江朝綱

おもひやる心ばかりはさはらじを
なにへだつらん峯のしら雲
橘直幹

祝
嘉辰令月歡無極
萬歲千秋樂未央
源英明

長生殿裏春秋富
不老門前日月遲
慶滋保胤

君が代は千代にやちよにさゞれ石の
いはほとなりて苔のむすまで
よみ人知らず

三 菅笠日記
本居宣長

八日初瀬を出でし後雨ふらで、四方の山の端もやうくあかり
行きつゝ、多武峯のあたりにては名残もなく晴れたりしを、今日も



鈴屋の翁 坂内青嵐筆

名残(大智か過ぎてわすれは残る) 一節 宣長

約りの山々は下界へウツクはじめた。感喜の春だ。



それはよく晴れ渡った五月の或日の事でした
 彼は又と女に三篠の清らかな流れに何つて微風になぶらうかな
 ホカ／＼と照りつける陽光の下に希望の輝やく春を詠り
 憧れの学園を突破しやうと、佛ちか本まつを詠うたひました
 彼らの仲にはカモメが我物顔にスウ／＼と舞い踊りまわつた
 春だ！春だ！新緑の春だ！然し、彼等の春は未春の春だ！

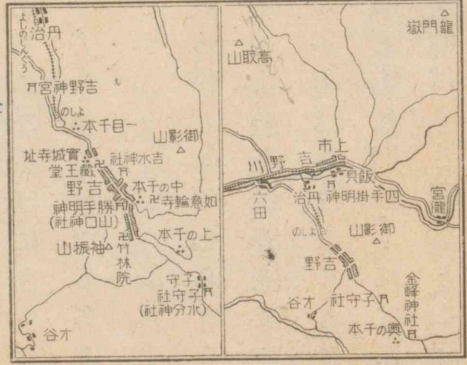
（たゞ、軽きまじりへ重きまじり外に表す）

(1)大和國(奈良) 縣吉野郡吉野川の北岸

在平が舟下りの舟の如く
 渡守を舟下りの舟の如く
 なりけり舟下りなむ
 不見なるを

(2)上市の南岸

またいとよき日にて吉野も近づきぬれば、けさはいと足かろく
 皆人の心行く路なればにや、程もなく上市に出てぬ。この間は一里
 とこそ言ひしか、いと近くて、半里にだにも
 足らじとぞ覺ゆる。吉野川、ひまもなく浮べ
 るいかだをおし分けて、こなたの岸に船さ
 します。夕暮ならねば、渡守ははやとも言は
 ねど、皆急ぎ乗りぬ。
 あなたの岸は飯貝(い)といふ里なり。さて川
 邊に沿ひつゝ、少し西に行きて、丹治といふ
 所より吉野の山にかゝる。やゝ深く入りも
 て行きて、杉むらの中に四手掛の明神と申すが、おはするは吉野の
 山口神社などにはあらぬにや。されど、さ言ふばかりの社とも見え
 ず。この森より下にも上にも、このわたりなべて、櫻のいと多かるな



多かる限り

心づきなし

むらぎえ

春立てる日

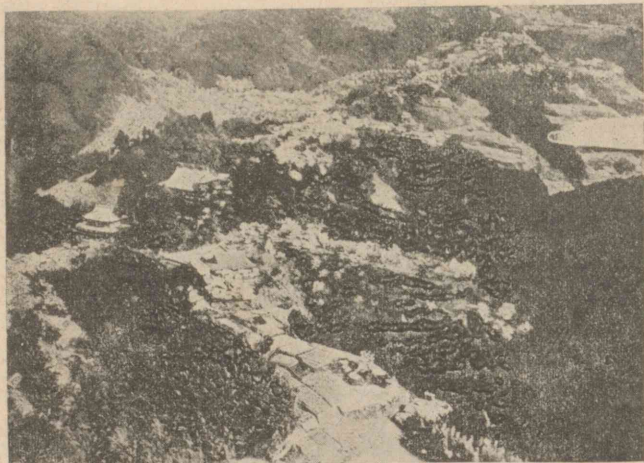
ものすれは
行動す

かをのぼりてのぼり果てたる所六田の方よりのぼる路との
行合ひにて茶屋ありしはし休むこの屋は過ぎこし坂路よりいと
高く見やられし所なり此所より見わたす所を一目千本とか言ひ
て大方吉野のうちにも櫻の多かる限りとぞ言ふなるげにさもある
りぬべく見ゆる所なるを誰とふをこの者かさる卑しげなる名は
附けけんといと心づきなし

花は大方さかり過ぎて今は散りのこりたる梢どもぞむらぎえ
たる雪のおもかげして所々に見えたる抑この山の花は春立てる
日より六十五日に當るころほひなん何れの年もさかりなると世
には言ふめれどまた我が國人の來て見つるどもに問ひしにはか
のあたりのさかりの程を見て此所にもものすればよき程よとこれ
もかれも言ひしまゝにその程うかゞひつけて出立ちしものしく
途すがら問ひつゝ來しにもよき程ならんと多くは言ひつる中に

まだし
かけても

まだしからんとこそ言ひし人もありしかかくさかり過ぎたらん



吉野山全景

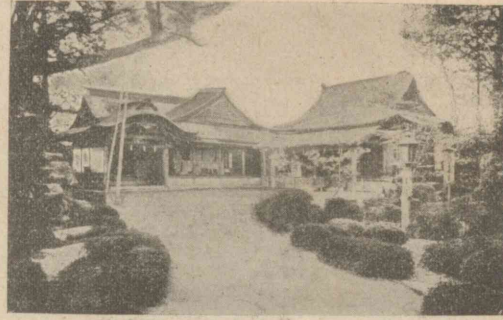
とはかけても思ひ寄らざりしぞか
しなほ此所にてくはしく問ひきけ
ばこの二月のつごもりがたいと暖
かなりしけにや例の年の程よりも
今年はいと早く咲出で侍りつるを
いにし三日四日ばかりやさかりと
は申すべかりけんさも雨しげく風
吹きなんどせし程に誠にさかりと
申しつべき頃も侍らぬやうにてな
んうつろひ侍りにしと語るを聞け
ばその年々の寒さぬるさにしたが
ひて遅くも疾くもある事にて必ずその程とかねてはこの里人も

(一)吉野金峯山の
鎮守金剛藏
王權現を祀つ
てある。

(二)藏王堂を距る
こと約五〇メ
一年一―五
小角山行者三六
業の庵室であ
つた吉野朝の
遺跡となり
今吉水神社と
なつた。

え定めぬわざにぞありける。

此所は吉野の里に入る口にて、これよりは町屋たち續けり。先づ



吉水神社

やどりをとらんとて、藏王堂には參らで過
ぎゆく。堂はあなたに向ひたれば、かの門は
うしろの方にぞ立てりける。そのあたりに
清げなる家たづねて、宿を定めて、先づしば
しうちやすみ、物食ひなんどして、今日明日
の事ども語らひ、道しるべすべき者やとひ
社て、先づ近き所々見めぐらんとて出立つ。こ
の借りつる宿は、箱やの何がしとかいふ者
の家にて、吉水院近き所なりければ、先づま
うづ。この院は路より左へいさゝか下りて、また少しのぼる所離れ
たるひとつの丘にて、めぐりは谷なり。後醍醐のみかどのしばしが

かけまくはか
しこけれど

(一)第九十六代後
醍醐天皇。
(二)第九十七代。

(三)吉野水みづ分峯。
子守こもり籠かご明神
と言ふ。

程おはしまし、所とて、ありしまゝにのこれるを、入りて見れば、げ
にもものふりたる殿のうちのたゞずまひ、よのつねの所とは見え
かけまくはかしこけれど、
いにしへの心をくみてよし水の
ふかきあはれに袖はぬれけり

かの帝の御像みがた、後村上の帝の御手づから刻みたてまつり給へると
ておはしますを、をがみたてまつるにも、
あはれ君この吉水にうつり来て

のこる御影を見るもかしこし

またそのかみの古き御たから物ども數多ありて見けれど、悉く
はえしも覺えず。この寺のうちにさゝやかなる屋の、前うちはれて
見わたしの景色いとよきがあるに立入りて、煙ふきつゝ見出せば、
子守こもりの御社の山、向ひに高く見やられて、その山にも、かたへの谷な

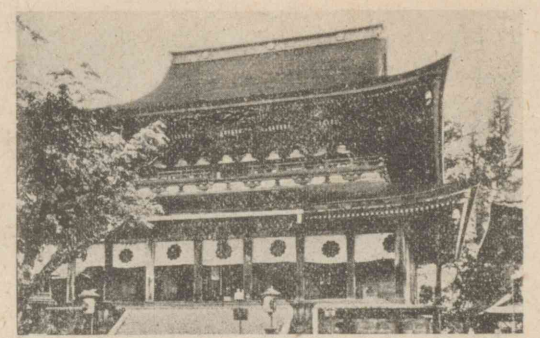
んどにもひまなく見ゆる櫻どもの今は青葉がちなるぞ返すく
口惜しきさは言へど奥なる花はさかりと見ゆるもなほ數多にて

みよし野の花は日數も限りなし
青葉の奥もなほさかりにて

瀧櫻と言ふもかしこにありと教ふ。
咲匂ふ花のよそめはたちよりて

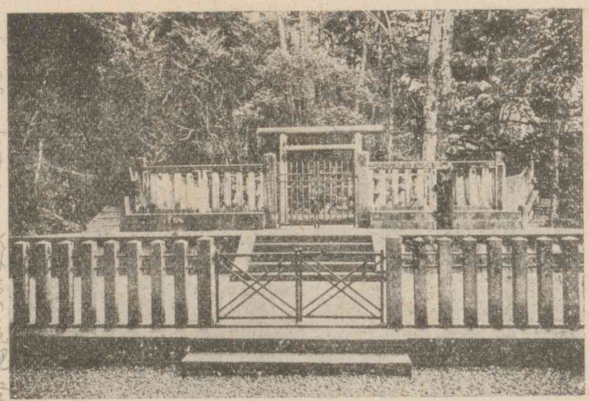
みるにもまさる瀧のしら絲
暮るゝまで見るとも飽く世あるまじうこ
そ。

さて藏王堂にまうづ御とばり掲げさせ
て見奉れば、いともしもく、大きなる御像の、忿
れる御顔して、片御足さゝげて、いみじう怖しきさまして立ち給へ
る、三柱おはする。たゞ同じ御やうにて、けぢめ見え給はず。堂は南向



藏王堂

にて、豎も横も十丈餘りありとぞ。作りざまいと古く見ゆ。前に櫻を



尾塔

四隅に植ゑたる所あり、四本櫻と言ふと
かや。堂の傍より西へ石の階を少し下れ
ば、即ち實城寺なり。本尊の左の方に後醍
醐天皇、右に後村上院の御位牌と申すも
の立たせ給へり。この寺も前の限り藏王
堂の方に續きて、後も左も右も皆や、下
れる谷なり。されどかの吉水院よりはや
や程廣し。この所は、かりそめながら五十
年餘りの春秋を経て、四代のみかどの住
ませ給ひし御行宮の跡なりと申すはい
かゞあらん。事たがへるやうなれど、をりくおはしましなれどせ
し所にてはありぬべし。今は堂も何も造りあらためて、そのかみの

(一)吉野山中の一
峯。勝手明神
の背後にある。

(二)勝手明神の南
金峯山寺の僧
坊。

(三)奈良縣高市郡
同吉野郡龍門
村。

名残ならねど、なほめでたく心にくきさま、異所には似ず。この寺を
出で、もとの路に歸り、櫻本坊などいふを見て、勝手の社はこの
近き年焼けぬる由、今はたゞいさゝかなる假屋におはしますを、拜
みて過ぎゆく。この社の隣に、袖振山とて小高き所に小さき森のあ
りしも、同じをりに焼けたりとぞ。御影山といふもこの續きにて、木
しげき森なり。竹林院、堂の前に珍しき竹あり、一つふしごとに四方
に枝さし出でたり。後の方に面白きつくり庭あり。其所より少し高
き所にあがりて、よもの山々見わたしたる景色よ。先づ北の方に藏
王堂、町屋の末に續きて、ものより高く目にかゝれり。なほ遠くは多
武の山、高取山、それに續きて東北の方に龍門の嶽など見ゆ。東と
西とは谷のあなたに間近き山々相續きて、かの子守の御社の山は
南に高く見あげられ、西北の方に葛城山は、いと遙かに霞の間
より見えたるなんと、すべてえも言はず、面白き所のさまなり。

(一)いざげふは
春の山邊にま
じりなん暮れ
なばなげの花
のかげかは
(古今集)素性
法師

花とのみ思ひ入りぬる吉野山
よものながめもたぐひやはある
時うつるまでぞ見をる。行くさきなほ見所は多きに、日暮れぬべし
と驚かせど、耳にも聞入れず、暮れなばなげの。なんどうち誦して、
あかなくにひと夜はねなんみ吉野の
竹のはやしのはなのこのもと
かくは言へど、行くさきの所も流石にゆかしければ、其所にたてる
櫻の枝に、この歌は結び置きて立ちぬ。

四 江戸時代の學者と明治維新

上下三千年の久しきに亙る我が國史中にあつて、幕末擾亂の時
代程、波瀾に富み複雑を極めたものはあるまい。そして明治維新に
よつて我が國是が確立し、一意國運の發展に向つた新日本の歴史

いんしやうはくす。

過程

誘導
鳥去ノ経験ト現存ノ
思惟ニ至ルニ至ル

(一)北條第二代の
子承久の變
を流し奉つた。
元仁四年(一
一八四年)歿。
年六十二。
(二)義時の子、北
條第三子の執
権。仁治三年
(一一九〇年)歿。
年六十。

こそ、我が國力の世界に認められた光輝ある過程であつた。我が國史中にあつて最も意味深い感銘を我々に與へるものは、畢竟明治の歴史を以て第一としなければならぬ。そして多年政權を握つてゐた江戸幕府が滅びて、明治の新政治が行はれるに至るまでには種々雑多な原因があるが、これ等の原因なり動機なりを誘導した江戸時代の學者の隠れた働も、また見遁す事は出來ない。

抑、尊皇の思想は太古以來我が國民生活の大道であつて、いかなる時代にあつても嘗て滅びた事はない。かの承久の役に當つて、北條義時の執つた態度は無道を極めたもので、天人共に憎むところであるが、それでも泰時が兵を率ゐて西上するや、直ちに單騎馳還り、若し乘輿親征あらばいかにすべき」と問ふと、義時は沈思して、「若し乘輿に遇はゞ、胄を脱ぎ弦を弛めて降を乞ふべし。諸將、師を督せば、千人が一人になるまでも戦ふべし」と答へたといふ。即ちかの義

(一)名は肅。江戸
時代初期の大
儒。元和五年
(一一七九年)
歿。年五十九。

我が國本來の
大義



藤原惺高

時と雖も、上御一人に對し奉つては、この心得があつたのである。されば江戸幕府の初頭、なほその全盛の時代に於て、かの近世學問の先驅をなした藤原惺高も、天照大神は日本のあるじにおはしますけれども、宮づくりはかやぶきで、極めて御質素にあらせられ、天下

の萬民を憐み給ひ、神武天皇そのおきてを守つて道を行ひ給ふによつて、代々榮え給ふのである。と述べてゐる。爾來多くの學者の説くところも、その場合によつて多少違つてはゐるが、要するに、我が國の神國たる

所以を述べ、我が皇統を至尊と仰ぎ奉る事は、我が國本來の大義であるといふ意味を力説しない者はないのである。我が國に於ける儒學は、朱子學、古學、陽明學などに分類する事が出來るが、その何れの學派にあつても、勤皇思想を述べてゐる學者

四 江戸時代の學者と明治維新 宋 朱熹 傳 孔子正統の學問を研究し

名教を尙ぶ

(一)江戸時代の儒者名は嘉永三年(1801)に垂加神道と唱道した天和二年(1812)に歿した。三十四年(1803)に歿した。三十四年(1803)に歿した。

(二)江戸時代の儒者名は安正徳元年(1804)に歿した。三十四年(1803)に歿した。三十四年(1803)に歿した。

(三)二卷。支那楚の屈原から明哲の時と名を得ぬ八大節士を撰集し、その略傳を記し、また歴代忠臣の行状を附記した。徳川光圀。

が多い。中にも名教を尙ぶ朱子學派に於ては、特にこの傾向が著しく、この學派に源を發してゐる山崎闇齋派の垂加神道や水戸學派の學問などは最も顯著なものである。闇齋の高弟淺見綱齋の如きは、楠木正成を讚美して至忠大功と稱し、自ら別號を望楠樓と言ひ、



徳川光圀

足利尊氏父子を亂臣の魁と罵り、終生處士を以て甘んじ嘗て足東土を踐まぬといふ程の氣節の士であつた。さればその著靖獻遺言は、幕末勤皇家の經典として尊ばれたもので、士氣を鼓舞する上に非常な功績があつた。また水戸學は天朝の正學とまで言はれ維新前

(一)水戸藩の儒官名は寛永三年(1636)に歿した。三十四年(1803)に歿した。三十四年(1803)に歿した。

精髓

國體の闡明

野朝正統論により、尊皇思想と離るべからざる關係を生ずるに至つた。特に栗山潛鋒の保建大記の如きは、保元以後建久年間に至る約三十年に亙る政權推移時代とも言ふべき史實を敘述し、これに嚴正な批判を加へたもので、尊皇思想の討究には最も恰好の著述であつて、或意味から言へば、水戸學の精髓とも稱すべき書である。蓋し水戸學は、一言にして盡せば、皇道を明らかにするにあつたから、苟も心を尊皇思想に寄せる者は、何人も争つてこれに就いた。修史事業によつて國體の闡明を期するに至れば、おのづから國民の精神は國史の回顧に向はざるを得ない。彼等が國史を讀んで、蘇我氏の横暴和氣清麻呂の誠忠、承久役乃至は吉野朝五十七年の歴史を回想し、若しくは四方を遊歴して親しくその史蹟を踏む時、勃然として心頭に涌くものは、必ず悲憤慷慨の氣であつた。かくして彼等の多くは、或はこれを文に作り、或は詩に詠じ歌に寄せて、纔

鐮銖を辨析する

(一)十二卷。新井白石の著。我が國の上古から徳川氏に至るまでの世に變遷を論じたもの。
獨創の見



頼山陽

人心に扶植した。

(二)名は具平。和の人。貞享二年(一七二五年)歿。年六十三。

かくの如く儒學の方面から尊皇思想が勃興した間に、國學の發達はおのづから國史、古典の研究を促し、延いては國體の闡明となつて、遂にその所論は期せずして尊皇論に達した。即ち古くは下河

かに思を遣つたのであるが、その中で最も人心に強い刺戟を與へたのは頼山陽であらう。山陽は博引旁搜、鐮銖を辨析するはおのづからその人ありとして、史實には俗書、軍談の類に取つたものが多く、その論贊なども、神皇正統記や讀史餘論などに據り、獨創の見は必ずしも多いとは言へないが、その長所は、文に生氣があつて、よく讀者の心を動かし、た點にある。その著日本外史や日本政記は、廣く天下に行はれて、北條氏や足利氏の惡むべく、吉野朝君臣の敬慕すべき事を一般

わろい例をいふ。いふを證する。わろい例をいふ。いふを證する。

(一)本姓羽倉。國學四大人の一人。文元年(一六六九年)歿。年六十九。
嫡々相承く

風雲を捲起す

(二)長崎の譯官。名は忠英。享保九年(一七三四年)歿。年七十七。
(三)一卷。日本の水土の他國に主張したものを。

邊長流、僧契沖に創つた國學の研究は、更に荷田春滿、賀茂眞淵、本居宣長と嫡々相承けて、次第に尊皇思想が濃厚になつて來た。特に宣長歿後の門人たる平田篤胤は、我が國を以て宇内第一の優秀な國となし、そしてこれは我が國が神國で、實に天照大神から連綿として數千年に及んでゐるのは他に求められぬところであるとして、我が國の世界に類のない美しい國である所以を説いたばかりでなく、これを神道に結び附けて、盛に皇室中心の神道を鼓吹したから、その門流も殆ど宗教的狂熱を以て師説を信奉し、漸く風雲を捲起すに至つたのである。更に當時の尊皇論などに最も關係が薄いと考へられる蘭學者にあつても、長崎の西川如見の如きは、その著日本水土考に於て、日本は清陽中正の水土で、開闢以來皇統今に至るまで變なきもの、萬國中唯日本あるのみとし、我が國の世界に秀でてゐる所以を説いてゐる。その外、淨瑠璃や實錄讀本などの作者で

巨擘

(一)二卷。歴代御陵につき漢文で考證記述したものである。

すら天子の尊ぶべき事を説いてゐる者が決して少くない。特に勸善懲惡主義の巨擘たる曲亭馬琴の如きは、盛に楠氏や新田氏の忠烈を謳歌したものである。かゝる氣運の際に、寛政三奇士の一たる蒲生君平は、山陵の荒廢を慨いて山陵志を著し、遂に宇都宮城主戸田氏の手によつて、山陵修補の業が企てられるに至つた。



蒲生君平

惟ふに開關以來皇統連綿たる我が國にあつては、天皇の親政といふ事が根本の原則であるから、幕府の存在は實は政治上の變態と言はなければならぬ。されば學問の勃興すると共に、國史の淵源に遡つて研究する者は、誰しも我が國體の闡明に力めて、疑惑をこの間に挟まない者はない。かくてこの疑問が究明され、これを筆にし、これを口にして世に問ふに及んで、世人も漸く思を茲に致

し、加ふるに外國關係の漸く急なるに及んで、幕府も遂に萬策盡きて大政奉還となり、更に進んで明治の新政となつたのである。そしてこれ等學者の言論が、いはゆる國論喚起に與つて最も力のあつた事は、固より言ふまでもない。

五 國語の變遷

(一)吉澤義則

言語は絶えず變化してゐる。しかもその變化は急劇に現れるものではなく、極めて徐々に連續的に行はれて行くものである。随つて、國語の歴史に就いても、その時期區分をする事は頗る困難である。紀元何年を境として、それ以前がどう、それ以後がどうといふやうな明確な區分は、勿論出來る事ではない。しかし、我々は國語の變遷の迹を通覽する時に、臚氣ながらも、或色の濃い部分と、他の色の濃い部分とがあるやうに感ずる。その境界はぼかされてゐて、何所

(一)國文學者、文部省博士、京都大學教授、明治三十九年(西曆一九〇六年)愛知縣に生れた。

と明確には指し難いけれども、その色の濃いと思はれる部分々々を中心として見れば、やはり或程度までは時期の區分が出来るやうに思はれる。さうしてその區分は、史料の少い奈良朝以前はさておいて、それ以後を大體、上古(奈良朝時代)、中古(平安朝時代)、近古(鎌倉室町時代)、近世(江戸時代)、現代(明治以後)といふやうに、政治史のそれに準據しても、甚だしく不自然ではないやうである。畢竟、政治上の變革、政治の中心の移動は、人心の動搖を招致するものであり、人心の動搖は言語の上に反映せずには已まないからである。左に國語變遷の迹を大觀してみよう。

奈良朝時代は漢文學や佛教も盛であり、制度、文物すべて外國のものを取入れるに急な時代であつたから、外來語の國語に取入れられた數も非常に多かつた事と思はれるが、歌の上にはあらはれたものは極めて少い。散文の中には割合に多く見えるが、それもすべ

國語の語彙

て名詞としての資格を與へられてゐるものばかりである。我が國語には限らないが、外來語の輸入は、殆どその國語の語彙を富ますだけで、語法までも影響を受ける事は極めて少いものである。

平安朝時代は平安奠都から約四百年、政治の中心が鎌倉に移るまでの間である。前代に引續いて重んぜられた漢文學が、一時全盛を極めた結果として、和歌の暗黒時代を現出したが、漸く國粹に目覺めては和歌の復興となり、遂には「古今集」の敕撰とまで展開していつた。平假名、片假名は萬葉假名から脱化して、國語の表記は愈、便利になつた。そこに散文の文學が發達し、國語は愈、精鍊された。

和歌の用語は、前代から或意識をもつて選ばれたのであるが、この時代になつては愈、限定されて、話語とは益、距離が出来た。たゞに和歌の用語ばかりでなく、散文の用語も朱雀天皇の頃から次第に話語から離れる傾向を持つたらしい。この時代の末に至つては、

萬葉假名

〔第六十一代〕

この傾向は益、顯著となり、平安朝盛時の言語は、以後永く文語の標準となつたのである。

この時代の外來語も主として漢語であつて、前代の如く名詞としてばかりでなく、形容詞、動詞、副詞等にも用ひられてゐる。なほそれ等は殆ど國語化した姿をもつて、物語などに現れてゐる。

この時代の末はいはゆる院政時代である。この頃になると、促音便や、バ行四段、マ行四段の動詞の長音便があらはれ、二段活用的一段化の傾向も稍強くなり、また連體形の終止形同化の傾向も生じて、次の時代に於ける大變化を豫想せしめてゐる。藤原氏の勢力が衰へ、武士が漸く實力を得始めた事などから、地方語が京都語に影響する事が多くなつた結果であらうと言はれてゐる。

鎌倉室町時代は鎌倉幕府時代、吉野朝時代、室町幕府時代を含んだ約四百年間で、要するに武士の跋扈した時代である。この時代は、

跋扈、まはりつゝ、はたらきまわつた

概して言へば戦亂が多く、人心は定まらず、學問、文藝は不振の時代であつた。文語と話語との懸隔は益、甚だしくなつたが、その文語も和歌はとにかく、散文に至つては、完全に前代のものを模し切る事が出来ないで、所々に當時の話語の面影をのぞかせてゐる。一方にはまた、漢文脈を多分に取入れた和漢混淆わんごんけいごうの文章が發達して、漢語の國語に入つて來るものが愈、多くなつた。漢語はかうした文字の上から移植された外に、この時代には、主として禪僧によつて、直接支那から輸入されたものが少くない。例へば、建法曾請行燈そへいしやうていの類である。江戸時代は江戸幕府の時代約三百年間で、戦亂が既に收り、人々が太平を楽しんだ時代である。この時代は室町時代の言語を承けて、話語の整理された時代と言ふべく、動詞では「落つる」「受くる」等の二段活用の形は漸次滅亡して、「落ちる」「受ける」等の一段活用に統一され、音便では「忍うて」「頼うて」など、バ行四段、マ行四段の長音便が廢

退して「忍んで」「頼んで」などの撥音便が進出し、關東語が勢力を得て後は「流いて」の如きサ行四段のイ音便は、もとの形に還元された。助動詞「よう」「未來」「てす」「指定」などの發達もあるが、三百年を通じて、概しては甚だしい變化を見ない時代である。方言では、江戸の發展と共に江戸言葉が發達し、次第に勢力を得て、文藝上では、今まで關西方言に「虐げられてゐた關東方言の爲に氣を吐くに至つた。江戸時代の文語は、大體に於て前代の繼承であつたが、元祿頃から奮ひ起つた國學者は、雅馴（なごころ）な古への國語に憧れて、その國語相を己等の時代に再現しようとして努力した。しかし一方にはまた、國語に無關心な漢學者があつて、その漢籍の讀み方が國語を混亂せしめた事も多かつた。

明治の普通文は、實に漢文讀み下しの影響を受けたものであつたのであるが、明治二十年代から動き始めた言文一致更生の機運

は、花を開き、實を結び、種々の試煉彫琢（ていれんてうく）を経た結果、大正時代に入つては、威嚴の不足感から容易に採用されなかつた新聞の論說などにまで採用されるやうになつて、文語文は次第に影を潜めて來た。外國語や外國語格を取入れる事は、國語を豊富にし、表現に新しみを加へる利點もあるが、その濫用は國語の純正を害するもので、嚴に戒めなければならぬ事である。名山、名川には日本アルプスとか、日本ラインとか外國名をつけ、國産品にも片假名で西洋流の名をつけて得々としてゐる現在、誠に外國語濫用の時代だと言はれよう。我等の周圍には西洋風の名をつけた物が如何に多くある事か。これでは既に精神的に彼等に屈服してしまつてゐると言ふべきで、世界諸國の上に立つて、世界の文化を指揮する事は、まだまだ前途遼遠であらう。

さて國語は上述の如く、それ自身の動きにより、また外國語を取

入れる事によつて幾變轉した。しかし、その根柢の本質は少しも變つて居らぬ。どこまでも我等の祖先の精神がその中に生活したところの國語である。東西二大方言の中にも、また多くの小さな方言を有する。しかし、それも畢竟根幹を得て茂る枝葉である。我等は今もその中に住して、縦には祖先の心を受け、横には同胞相結ぶのである。國語は實に一國の標識であり、國體を維持し國民を結合する精神的の鎖である。これを世界の歴史に見るに、一國の國語の消長は、その國の國勢の消長に緊密な交渉をもつてゐる。故に我等は現代の外國語濫用を悲しむと共に、方言の統一が速に行はれぬ事も悲しまねばならぬ。方言は國語の表面だけの相違ではあるにしても、その相違は國語の力を殺ぐ事が極めて大きいのである。而して方言の統一は、學校に於ける國語教育だけで出来るものではない。新聞、雜誌、文學作品等も與つて力はあるもの、なほそれだけで

は出来るものではない。要は國民全體の自覺と努力とに俟たねばならぬ。

現在は、大體東京語が標準になつてはゐるが、未だ標準語の問題は明確に具體的に解決されては居らぬ。方言統一に向つて進むに方つて、先づ必要な道標は標準語でなければならぬ。更に國語を純正ならしめるには如何にすべきか。漢字と共に取入れられた無數の漢語、近世以後取入れられた多くの歐米語、これ等の整理を如何にすべきか。また表記上の問題としては、文字を如何にすべきか。假名遣を如何にすべきか。これ等はすべて國民全體の自覺に俟たねば解決されぬ事からである。國語の愛護、それが一部の學者にのみ唱へられて、未だ國民全體の聲とならぬのを悲しむ。

— 國語史概説 —

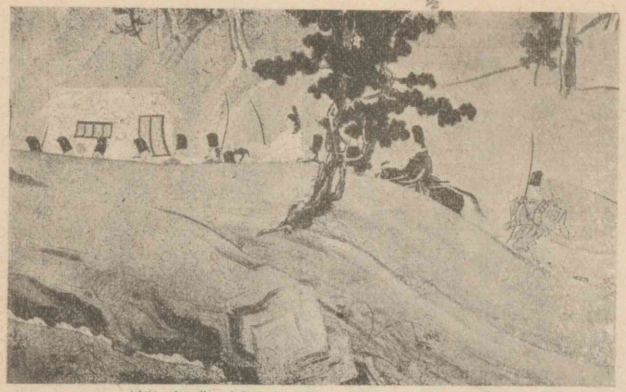
おんを (祖母)
おんを (着)
おぢさん (祖父)
おぢさん (着)

六 大原御幸

(一)第七十七代
(二)第八十二代後
鳥羽天皇の御
年代(一八四六
年)

南祭
北祭(葵祭)
つら
夜をこめて

(三)大納言兼雅。
(四)權中納言源通
親。



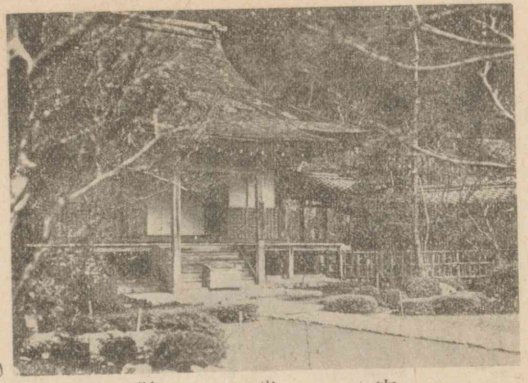
大原御幸(下村觀山筆)

後白河法皇は文治二年の春の頃建禮
門院の大原の閑居の御すまひ御覽ぜま
ほしう思し召されけれども如月彌生の
程は嵐はげしう餘寒も未だ盡きず峯の
白雪消えやらて谷のつらもうち解け
ずかくて春過ぎ夏立ちて北祭も過ぎし
かば法皇夜をこめて大原の奥へ御幸な
るしのびの御幸なりけれども供奉の人
人には後徳大寺花山の院土御門以下公
卿六人殿上人八人北面少々さぶらひけ
り

(一)「まがふとて
厭ひし峯の白
雲は散りてぞ
花の形見なり
ける二續後撰
集後久我太
政大臣」

よしある様

(二)「夏山の青葉
まじりの迎櫻
初花よりも珍
しきかな二金
葉集藤原盛
秀」



寂光院

遠山にかゝる白雲は散りにし花の形見なり青葉に見ゆる梢に
は春の名残ぞ惜しまる。頃は卯月二十日餘りの事なれば夏草の
茂みが末を分入らせ給ふに初めたる御
幸なれば御覽じなれたる方もなく人跡
絶えたる程も思し召し知られて哀れな
り。

西の山の麓に一字の御堂あり即ち寂
光院これなり舊う造りなせる泉水木立
よしある様の所なりいらか破れては霧
不斷の香を焼き桐落ちては月常住の燈
をかぐどとはかやうの所を申すべき。

庭の若草茂り合ひ青柳絲を亂りつ池の浮草波に漂ひ錦を晒す
かとあやまたる中島の松に懸れる藤波のうら紫に咲ける色青葉

まじりの遅櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲亂れ八重立つ雲の絶
間より、山杜鵑のひと聲も、君の御幸を待ち顔なり。法皇これを叡覽
あつて、かうぞあそばされける。

池水にみぎはの櫻ちりしきて

なみの花こそさかりなりけれ

ふりにける巖の絶間より、落來る水の音さへゆゑびよしある所な
り。緑籬の垣、翠黛の山、繪にかくとも筆も及び難し。

さて女院の御庵室を叡覽あるに軒にはつた朝顔はひかりし

のぶまじりの忘草、瓢箪屢、空し草、顔淵が巷に滋く、藜藿深く鎖せり、

雨、原憲が樞を濕すとも言ひつべし。杉のふきめもまばらにて、時雨

も霜も置く露も漏る月影に争ひてたまるべしとも見えざりけり

後は山前は野邊、いさゝ小笹に風騒ぎ、世に立たぬ身の習とて、憂き

節しげき竹柱、都の方の音づれば、間遠に結へるませ垣や、僅かに言

(瓢箪屢、空、草、
滋、顔淵之巷、
藜藿深く、雨、
濕、原憲之樞、
(和漢朗詠集、
孔子の弟子、
字は子思、)

廿五廿六

十善



いら

不殺生

偷盜

別淫

妄語

飲酒

兩舌

綺語

悪口

邪淫

貪慾

つやく

とふものとは、峯に木傳ふ猿の聲、賤が爪木の斧の音、これ等が音
づれならでは、まさきのかづら、青つゝら、來る人稀なる所なり。

法皇、人やある、と召されけれども、御いらへ申す者もなし。稍

あつて、老い衰へたる尼一人参りたり。女院はいづくへ御幸なりぬ

るぞと仰せければ、この上の山へ花摘に入らせ給ひて候と申す。さ

こそ世を厭ふ御習とは言ひながら、さやうの事に仕へ奉るべき人

もなきにや、御いたはしうこそと仰せければ、この尼申しけるは、五

戒、十善の御果報の盡きさせ給ふによつて、今かゝる御目を御覽せ

られ候にこそ、捨身の行になじかは、御身を惜しませ給ひ候べき。過

去未來の因果をかねて悟らせ給ひなば、つやく御歎きあるべか

らず。昔、悉達太子は十九にて伽耶城を出で、檀特山の麓にて、木

葉をつらねて肌をかくし、峯に上つて薪を採り、谷に下りて水を掬

び、難行苦行の功によつてこそ、遂に成等正覺し給ひけれとぞ申し

〔信西の妻朝子。〕

ける。

この尼の有様を御覽すれば、身には絹布のわきも見えぬ物を、結び集めてぞ著たりける。あの有様にても、かやうの事申す不思議さよと思し召して、「抑、汝はいかなる者ぞ」と仰せければ、この尼さめさめと泣いて、暫しは御返事にも及ばず、稍あつて涙を抑へて、「申すにつけて、憚り覺え候へども、故少納言入道信西が女、阿波の内侍と申す者にて候なり。母は紀伊二位。さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬる程思ひ知られて、今更せん方なうこそ候へ」とて、袖を顔に押しあて、忍びあへぬ様、目も當てられず、法皇げにも、汝は阿波の内侍にこそあんなれ。御覽じ忘れさせ給ふぞかし。何事につけても、たゞ夢とのみこそ思し召せ」とて、御涙せきあへさせ給はねば、供奉の公卿、殿上人も、「不思議の事申す尼かなと思ひたれば、ことわりにて申しけり」とぞ、各感じあはれける。

〔彌陀、觀音、勢至の三尊。〕
 〔文殊と共に釋迦佛に侍する菩薩。〕
 〔支那隋代の名僧。〕
 〔第八十一代安徳天皇。〕
 綾羅錦繡

さて彼方あそこ此方こゝを窺覽のぞかんあるに、庭の千草露重ちくそうつゆしづく、籬かきに倒れかゝりつ、外面うへめんの小田も水越えて、しぎたつひまも見えわかず。さて女院の御庵室ごあんしつに入らせおはし、障子かざりを引きあけて、窺覽あるに、一間いっけんには來迎らいごうの三尊さんそんおはします。中尊ちゆうそんの御手ごてには五色ごしきの絲いとを懸けられたり。左ひだりに普賢ふけんの繪像えいざう、右みぎに善導ぜんどう和尚じやう並びに先帝せんていの御影ごえいを懸けられたり。蘭麝らんじやの匂においに引きかへて、香かの煙えんぞ立ちのぼる。さて傍わらわを窺覽あるに、御寢所ごしんじよと思しくて、竹たけの御竿ごさんに麻あしの御衣ごい、紙かみのふすま、なんど懸けられたり。さしも本朝漢土ほんてうかんちのたぐひなるたぐひ敷しきを盡つくし、綾羅錦繡あやうらきんきうの袈あやうらもさながら夢ゆめにぞなりにける。法皇御涙ほふうごなみを流させ給へば、供奉くわんぷの公卿こうけい、殿上人てんじやうじんも、まのあたり見奉りし事ども、今のやうに覺えて、皆袖みなそでをぞ絞しぼられける。

稍しやうあつて、上の山やまより濃のき墨染すみぞめの衣い著きたりける。尼二人にににん、岩いわのかけかけちを傳つたひつゝ、おりわづらひたる様さまなりけり。法皇ほふうあれはいかなる

花がたみ

(一)藤原維實(ま) 伊通の子(永) 曆元年(一八) 二〇年(一八) 三十五年(一八) 藤原盛國の子 (三)平重衡の妻

者ぞと仰せければ、老尼涙を抑へて、花がたみ臂にかけ、岩つゝ、取具して持たせ給ひて候は、女院にてわたらせ給ひ候。爪木にわらび折添へて持ちたるは、鳥飼中納言維實が女、五條大納言國綱の養子、先帝の御乳母大納言典侍局と申しもあへず泣きにけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、皆袖をぞぬらされける。女院は世を厭ふ御習と言ひながら、今かゝる有様を見え参らせんずらん恥づかしさよ消えも失せばやと思し召せどもかひぞなき宵々毎の、閨伽の水掬ふ袂も萎るゝに、曉起の袖の上山路の露も繁くして、絞りやかねさせ給ひけん山へもかへらせ給はず、また御庵室へも入らせおはしませず、あきれて立たせましたる所に、内侍の尼参りつゝ、花がたみをば賜はりけり。世を厭ふ御習、何か苦しう候べきはやく御見参あつて、還御なし参らせ給ひ候へ」と申されければ、女院御涙を抑へて、御庵室に入らせおはします。一念の窓の

閨伽の水

攝取
十念

(一)内藤素行。松山市の人。漢詩をも善くし。年歿、年八十五。夕月や納屋も、既も棟の影。鳴雪

梅の司

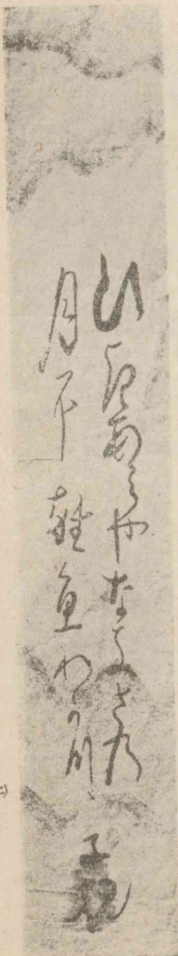
前には攝取の光明を期し、十念の柴の樞には聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思の外の御幸かなとて、御見参ありけり。——平家物語——

七一系の天子

元日や一系の天子富士の山

夕日ぐ屋の梅の影

氷とけて古藻に動く小海老かな



春風や役者乗せたる葛籠馬

松宇

(一)河東兼五郎
愛媛縣の人。
昭和十二年歿。
門川に流れ
藻絶えぬ五
月哉

碧

(二)尾崎徳太郎
小説家。東京
市の人。明治
三十八年(二
五三三)歿。

雨來らむと
して頻らむと
かる花火哉

紅葉

(三)角田眞平
政治家。實業家。
靜岡縣の人。
大正八年歿。
年六十四。

(四)村上莊太郎
慶應元(二
五二五)年上
野國(群馬縣)
に生れた。

春雷や家遠く見ゆる野路かな
五月雨やからす草ふむ水の中

六朝体

(一)虚子
碧梧桐

門川に流る藻絶えぬ五月哉

蹟筆桐梧碧

釣るゝとも見えぬ小舟や行々子
炎天の小さきつむじや豆ばたけ

(二)紅葉
井泉水

すまじらひつゝ
夕立(三)金鼓山河を動かして
露涼し形あるものみな生ける
樂書の扇に残る暑さかな

蹟筆葉紅

(三)竹冷
(四)鬼城
醒雪

うりもみや
絹板ならず
女房ふり
竹冷

(一)大野豊太
醫師。熊本市
の人。大正二
年(一九一三)
歿。年四十四。

(二)大谷正信
文學者。昭和
八年歿。年五
十九。

(三)巖谷季輔
作家。昭和
八年歿。年六
十四。

(四)松瀬彌三郎
明治二年(一
八七五)大阪
市に生れた。

立秋の大鐘つくや瘦法師
一山にひびく魚板や秋ゆふべ

(一)酒竹
(二)繞石

しんしん
組板なすり
のりしん

蹟筆冷竹

生海鼠々々
汝成佛して
何のぼとけ

蹟筆雪醒

朝寒の胸ふくらせし雀かな
野分してけもなくすみぬ水や空

(三)小波
(四)青々

つげくらや雲千三間
雨

蹟筆竹酒

七一系の子

夕立の空よりりなく
すのり月かな

頼正

志はすは清水さうさうしを
歌人のあこよ

落葉ふる音ひとしきり大伽藍
北風に提げゆく網のしづくかな

紫影
蝶衣

水いろの空
開け行く雪

蹟筆音瓊

乾蛙のからついてゐる柱かな
吹雪やんで月落葉松のうへに出づ

漱石
音瓊

箬の底山吹
の落花叩け

蹟筆字乙

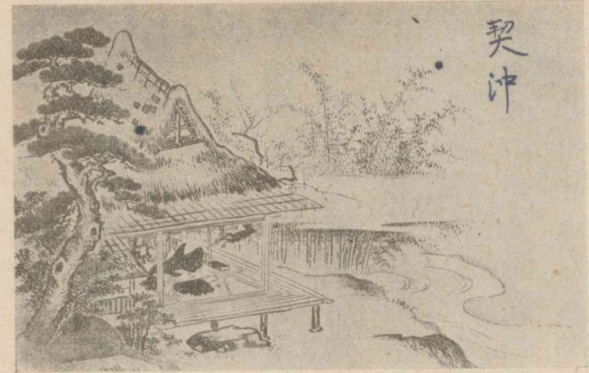
降りやみし吹きやみし夜のさゆるなり
行く年やまことをまもる一心事

乙字
佛句

(一)藤井乙男。文學者。京都帝國大學博士。明治元年(一八六八年)生れた。兵庫縣に生れた。
(二)高田千郷。瓊。和州縣の郷人。四十五年歿。年昭古。
(三)沼波武夫。名古。文學者。屋敷市の人。五十二年歿。年昭古。
(四)大谷光演。前。東本願寺管長。明治八年(一八七五年)生れた。京都市に生れた。
(五)大須賀乙字。文學者。福國縣の人。十九年歿。年昭古。
(六)明治大學學長。明治十五年(一八八二年)生れた。埼玉縣に生れた。
(七)儒者。幕府の儒官。名は眞幹。順庵と號した。江戸の人。新井白石は其の門から出た。元祿十一年(一六九八年)歿。年昭古。
(八)歌人。歌學者。駿河の歌人。來の歌論を破つた。近世の歌壇を革新した。寶永三年(一七二六年)歿。年昭古。

八 國學と日本精神 その一 河野省三

元祿の頃はいはゆる諸道興隆の時期であつて、儒學には木下順庵、伊藤仁齋、荻生徂徠、貝原益軒等の大家が輩出し、文壇には井原西鶴の小説、松尾芭蕉の俳諧、近松巢林子の戯曲などが何れも新生面を開き、繪畫には菱川師宣、英一蝶尾形光琳等がそれ、時世を粧ひ、國文學にあつては契沖が古典に新研究を試み、北村季吟が舊來の諸註を集成し、戸田茂睡が新しい歌風を唱道した。それ等と相前後して、徳川光圀は彰考館を設けて大日本史、禮儀類典などの史籍を編纂し、新井白石は古史通、讀史餘論などを述作して史學の進歩を促



(載所集全沖契) 沖 契



(一)國學者。江戶の人。神道を唱へて聲名が
 ありて幕府に
 召されて仕へ
 た。元祿七年
 (一七〇〇年)
 歿。年七十九
 (二)國學者。京
 都の人。尾張
 津島神社の祠
 官。元祿十六
 年(一七〇三
 年)歿。

文運は急運の
 汚隆に順小

し、また山崎闇齋(一)、吉川惟足(二)、眞野時繩等は神道を鼓吹して、敬神尊皇の精神を喚起した。

かういふ思想、文化共に活氣を帯びた元祿前後の社會は、一方に於て天下の太平に馴れ、物質上の欲望に誘はれて、漸く緊張を缺くやうになつたが、しかもまた他の一面にあつては、楠公崇拜の思潮も漸次に高まり、赤穂義士の快舉に忠節を尙ぶ風もまた強まつて來た。かくて質實剛健の氣風と、實際生活を重んずる學問とを獎勵した享保の政治に際會して、日本の社會はおのづから堅實な學風を要求するに至つたのである。

かくの如く元祿の時代は豊富な内容を有してをつたつたので、茲に日本の社會は、各方面に互つて精神的展開を見る事が出來た。先づ史學の進歩と尙古の趣味とから、上代文學の研究が盛になり、それに種々な思想と要求とが加つて、古典の闡明に力を用ひる學者が

多くなつて來た。次にその結果として、我が建國の精神や國體の精華が追々と明らかにになり、昔から蒙つた外來思想の惡影響に對する反感も強まり、深い國家的觀念が起るやうになつた。更にそれ等の關係から、史實に立脚した敬神崇祖の思想が湧起し、また上代人の性情、即ち我が日本人の有する本來の國民性に對して、憧憬(三)の情を深めるやうになつた。それから活氣に富んだ學界には、自然に忠實で自由な研究が試みられる事となつて、古語の意義も明らかにになり、古典の精神も發揮されるやうになつて來た。それ等の關係から、我が上代日本人の快活で明るい心持が知られ、雄々しく大らかな氣分が認められたのであるが、一方に感情の解放を求め、他方に意志の訓練を必要としてゐた當時の武士や一般國民の間には、勢ひさういふ古典の思想と、和歌國文の趣味とが比較的にたやすく受容られるやうになつたのである。

かやうな種々の國內の事情と人心の要求とから、茲に一部識者の間に眞實な國民的自覺が起つて來た。この自覺に基づいて、我が國體、國史、國文などの研究に向つて志を立てた最も著しい學者が荷田春滿であつて、引續いて賀茂眞淵、本居宣長、平田篤胤等が、それぞれ師弟關係でその學風の發展に力を盡したのである。かういふ學風が即ち國學であつて、數多い國學者の中でも、特にこの人たちが國學の春滿は山城國伏見の稻荷神社の祠官羽倉氏の一族で、名はまた東鷹とも書いた。博學敦厚の人で、律令の學に精しく、江戸幕府の信任を受け、晩年、倭學校の創建を計畫したが、果さなかつた。萬葉集童蒙抄、伊勢物語童子問など多くの著



荷田春滿

四人として尊重されてゐる。

(一)今、京都市伏見區深草葦ノ内町官幣大社

(一)將軍吉宗の第三子松平信の父。明和八年(一七九一)歿。年三十七。

述がある。

眞淵は遠江國の人で、岡部氏を稱し、縣居と號した。春滿に就いて國學を修め、江戸に出て萬葉振の歌風を高調し、田安宗武の寵遇を



賀茂眞淵

受けた。門下からは村田春海、橘千蔭などの人才が輩出して、古學は爲に大いに起つた。萬葉考、祝詞考、冠辭考、國意考、眞などの新研究が少くない。

宣長は縣居門下に出た出藍の才で、蓋し本邦稀に見る學者である。伊勢國松阪に生れ、鈴屋と號した。少年の頃父を喪ひ、母の苦心によつて小兒科の醫師となり、また契沖や眞淵等の著書に動かされて、我が古典の研究にも心を潛めたが、壯年の頃眞淵を松阪の旅宿に訪うて、愈、皇國學への志を固くした。宣長は博覽強記で、獨創的識見と組織

青、藍ヨリ出テテ
藍ヨリ青、レシトコト
話より出た言を
弟子が師よりオ
能はずとホ、ある

(一)後鈴屋と號した。年六十八。年六十八。年六十八。
 (二)伊勢松阪の稻掛家に生れて、養子と紀子と稲長に仕へ、紀子と稲長に仕へ、紀子と稲長に仕へ。
 (三)第百十九代光格天皇の御代(二四五五年)に上。二四六一年。
 (四)同上。二四六一年。

的學才とに富み、古事記傳の大著をはじめ、玉勝間、直日靈、玉くしげ、玉の小櫛、玉銚百首、歷朝詔詞解等の著書が多く、これ等は何れも後世の學界に裨益を與へてゐる。その子春庭の詞の八衢は文法に關する名著であつて、養子大平もまた忠實な家學の繼承者である。鈴屋の門人は天下に普く、その主張した日本精神の覺醒は、寛政頃の國民思想に大きな反省を促したが、その後を繼いで幕末の思想界に強い衝動を與へ、勤皇の精神に深い刺戟を加へて、國學をして明治維新の一勢力たらしめた功勞者の一人は篤胤である。篤胤は出羽國秋田の人で、氣吹屋と號した。寛政七年の春、二十歳の時、江戸に出て、苦學力行の生活を營み、享和元年即ち宣長の歿した年、その著書に啓發されて、いはゆる歿後の門人となり、常に幾多の艱難と闘ひつゝ、善く先人未踏の研究を試み、また斷えず反對者の惡罵を排撃しつゝ、終に等身の著述を公にした。その意志の鞏固

(一)若狭小濱の長考證。年七十四。年七十四。年七十四。
 (二)歌人。伊勢の獨學。年七十四。年七十四。年七十四。
 (三)農政家、醫師、兵衛家。諸藩を遊歴して、世を説いた。年八十三。年八十三。年八十三。
 (四)勳皇家。淡本姓。通才。國典。久。年三十三。年三十三。年三十三。
 (五)石見國津和野の藩士。初野。年五十二。年五十二。年五十二。



香川景樹

と理性の透徹とは、正に彼をして立志傳中の人物たらしめたのであるが、その雄大な學風と熱烈な主張とに共鳴した多くの門人は、おのづからその精神を、幕末から維新へかけて日本の社會に活躍させたのである。篤胤の著書は古史傳、玉嚮、靈能眞柱、古史徵、古道大意、俗神道大意、印度藏志、出定笑語、西籍概論など數十部に上り、支那の古書、佛教の經典などに關しても、その深い造詣を示してゐるものが少くない。國學界にはなほ多くの天才が輩出した。國文に妙を得た上田秋成、歴史に精通した伴信友、和歌に巧な香川景樹、斬新な研究に長じた橘守部、國學を政治、經濟と結合した佐藤信淵、理性の精緻を恣にした鈴木重胤、國學に新生面を開拓した大國隆正の如き、何れも豊富な原因に興起した國學が、多方面の發展

姓は野々口、
天柱山人と號
した。國學に
通じた。鳳王
政復古の意を
抱いた。見
治古の明
三十四年(一八
十一年)歿。年
八十。

暢達

をなし得る可能性を有する事を事實に示したものである。
江戸時代の學界と教育界とは儒教の勢力下にあつた。佛教の信
仰も、幕府の保護と長い間の習慣とによつて少からぬ勢力があつ
た。神道に關する學說も、元祿享保の頃には可なり多く世に行はれ
た。かゝる間にあつて國學が盛に發達し、當代の後半期に於ける最
も重要な思想學說となつて、終に明治維新の有力な原動力となつ
た理由は、那邊に存するのであらうか。

江戸時代には鎖國政策が行はれ、國民は一般に太平無事を樂し
んで居つた。隨つて學問、教育はすべて保守に甘んじ、國民思想は全
く冬眠を貪つて居つたやうに考へられてゐる。しかしながら、日本
精神は決して永く安逸を好むものではない。日本民族は常に偷安
姑息に満足してをるものではない。江戸時代にも理性は斷えず生
きた知識を求め、感情は成るべく朗かな暢達を望み、意志は底力の

外見のしげきを
悟性なり成り
理性(人間のみあり)

善人を永くから具
す。智能
物の心理又は本性を
研究する。

感官(王威)
「おまわな一もの
何となく感ずるもの」

偷安姑息
せなければならぬ
をほつてをいふ
にうけてゐる。

ある信念を欲して居つたのである。國學は自由な研究と清新な學
風とによつてその理性に適應し、純樸快活な思想と平易自然な教
育とによつてその感情に満足を與へ、國體觀念と敬神思想とを強
調して、その意志に緊張味と靈的氣分とを加へた。かういふ人心の
傾向に乘じ、時代の要求に合した所に、國學の發展を見る事が出來
たので、其所に國學の特性と歴史的價值とが存するのである。
國民の知情意に満足を與へ、時代の趨勢に乗じて進展して來た
國學には、種々な特色を具へた學者が出現した。かくて國民は、國學
によつても文化を消化し創造する能力を鍛鍊し、國體を尊重し自
國を愛護する信念を樹立した結果として、明治維新を大成したと
同時に、明治以後の新文明を開拓し得たのである。國學は舊時代に
於ける鎖國日本の内容の充實に貢獻したばかりでなく、新時代の
國際日本に對しても、重要な自主的立場を据附けたのである。

靈威
大感

九 國學と日本精神 その二

明治維新は我が國の政治に取つても、また國民生活に取つても、實に目ざましい變動であり、進展であつて、日本文明の發達上、最も顯著な劃期的事件であると共に、日本民族の精神的活動が、いかに豊富な價值を有するかを雄辯に物語る事實である。

明治維新は嚴肅雄大な王政復古であると同時に、快活大膽な開國進取である。この復古的事業と進取的態度とは、固より識者の賢明と一般の猛進とも關係してをるが、その根柢には正しく日本精神の自覺が存し、或はその元氣が動いて居つたのであると見なければならぬ。實に我が日本精神の興隆が舊幕時代の日本を解放し、その活動が明治時代の國運を展開した最も大きな力である事は、何人も否定する事が出来ないのである。

玉串
神前には誠心を以て
おまつげし、神の
枝に玉串をさづけ
もの

そのもの、本
かき持つてゐる
な

(一)東京市芝公園
内。淨土宗。徳
川氏の菩提所。
(二)伏見宮、有栖
川宮、桂宮、閑
院宮の御四家。
(三)元三位主水正
維新後外務卿
となり、次いで
特命全權公使
となつたが、
明治六年(二
五三三年)二
十九年三月病
歿した。

大史
鳥の跡
かきとりの
鳥の跡

近世に於ける我が國史の發展、即ち我が國民の活動を左右した最も本質的な力は、日本精神その物であるが、この日本精神を覺醒せしめ、培養し、そして活躍せしめたのには、國學者の力が與つて最も力あると言はなければならぬ。

明治三年五月五日、芝の増上寺の門前にあつた紀州邸に於て、四大人の靈祭が執行された。四親王家からも、各大臣からも、和歌や幣物が贈られ、外務卿澤宣嘉は自ら玉串を捧げ、神祇官の主要な官員が殆ど總出で、祭典に奉仕した。その盛大な靈祭は、多くの參列者をして、坐ろに明治維新に光を添へた四大人たちの學問的、精神的の功績を追慕せしめたのである。

ふみ分けよ倭にはあらぬ唐鳥の
あとをみるのみ人の道かは
これは春滿が「書」といふ題で詠んだ歌である。日本人は先づ日本

の文化に親しみ、日本の精神を自覺しなければならぬ。漢籍、佛典にのみ心思を勞した當時にあつて、春滿が蹶然起つて皇國の學を復古し、古道を發揚しようとした意氣と識見とは、誠に深く歎賞しなればならぬのである。

飛驒たくみほめて遣れる眞木柱

たてし心はうごかざらまし

(一) 實曆五年の秋眞淵はその家を新築したが、古典を愛し、民族精神を重んずる人たちの集ひ壽いだ時に、徐に詠んで示した一首が即ちこの歌である。學問を修め、國家に奉仕しようとする者は、常にその志を堅くし、その信念を深くしなければならぬ。眞に眞淵が萬葉集の歌風を愛し、古語の註釋に努力したその理想には、高いものがあつた。その理想を繼承し發揮した者が、學界の偉人宣長である。宣長の詠じたしきしまのやまと心を人間は、朝日ににほふ山さ

(一) 第一百十六代桃園天皇の御代(二四一五年)

詩人、人々の行

為か人々は

やふい

日域三絶

日本のやふいれ物

刀劍

櫻

富士山

性淡

性淡は平氣であらう
リニシてあふ

くらばなといふ一首は、恐らくは最もよく人口に膾炙された名歌の一つであらう。日本精神の昔ながらの姿としての日本心を最も善く考察し、最も深く愛重してゐた宣長は、その特色を具體化した櫻花を好んで居つた。その山櫻に朝日が映じた姿は、莊麗端嚴な秀峯富士山と共に、正しく日本心の表現である。宣長はその日本心を我が古典に見出し、これを以て我が國體の根柢に培ひ、我が文化の精髓を形づけるものと信じたのである。

我が日本心の第一の特色は神々しさの氣分である。即ち上品な尊い一種の神聖感である。第二の特色は懐かしさである。何となく親しみのある濶かい心持である。第三の特色は清々しさ、即ちさつぱりとした恬淡な性情である。この三つの特色は、神社や國旗に於て最もよく現れてゐるが、また朝日の射した麗しい山櫻の花の趣にも、これを眺め見る事が出来る。この點から觀て、宣長のかの三十

一文字は、最も簡潔に、且適切に、日本心の特徴を譬へ得た千古の絶唱であるとも言へよう。この日本心が力強く生動して日本魂となり、神州の正氣となるのである。

日本心の神々しさの念と清々しさの氣分とが結合して、其所に雄々しさ、即ち強い勇氣が出て来る。またその神々しさが懐かしさに作用する時に、みやびといふ優雅な情操が生ずる。更に清々しい氣持に懐かしさの情が結び附くと、大らかさといふ廣いゆつたりとした心持になる。かういふ種々の貴重な性情の源泉が日本心であり、その表現が日本文化の特色である。

四大人のうちで、眞淵の性格は大らかであり、宣長はみやびな性情に富み、春滿は寧ろ雄々しい氣象に近かつたが、篤胤は殊に雄々しい性格の持主であつた。かゝる各人各様の特色は、主としてその個性に基づくのであるが、またその人たちの環境としての地理と

性
格
の
習
慣

快感を満喫する

時代との關係にも由るのである。とにかく日本心を發揮した四大人が、それ／＼かやうな特色を有して居つた事は、誠に興味深い現象であつて、其所にまた國學の多様性があるとも言へるのである。艱難と努力とに生活苦を嘗めた篤胤は、またその活動によつて學者としての快感を満喫した。次の一首は彼の覺悟と業績とを語るものである。

想操として行爲として自家のちりつてくし身は身をてくし
雲となり或は雨ともふりしきて

かみよの道に身をやつくさん

負けじ魂

この決心は全くその爲せば成り爲さねば成らず成る業を成らずと棄つる人のほかなさといふ負けじ魂から來てゐるのである。篤胤は理性に富み、感情を重んじたが、何れかと言へば意志の人である。その磐石のやうな意志と絶倫な精力とが、その比較考證に長じた古學と、活氣横溢した古道とをして、幕末の學界に雄飛せしめ

過去の業績の内容の

歸郷

歸郷

（そちつべき場所へ）
（そちつ）

たのである。かくて篤胤の學風は、國學をしておのづから偏狹排外の角度を鋭からしめたけれども、また時代に適應して國學を活躍させた功績は、これを多としなければならぬ。

國學はその勃興した原因に於て種々の事情が結合したやうに、その發達した結果にあつても種々の意義が見出される。換言すれば、國學は我が近世の思想史上に於て幾多の役目を果してゐる。國體觀念を明徴にして、我が國民道德の歸嚮するところを明確にした事がその一である。人間生活に取つて最も貴い眞心を力説し、その純眞な明るい活動を以て人格の基礎とした事がその二である。我が國民性の本質を究明して、その復活に努力し、其所に日本文化の特徴を求め、國民精神の根柢を置いた事がその三である。古典の價値を闡明し、國語の淵源を探究して、我が國特殊の古典教育を開拓した事がその四である。我が上代史の事實と家庭に於ける實情

心かたきよつてせま

吾人は恐怖によつて
宗教を創む

心に教は
（そちつ）

とに願て、母性の尊重を説き、女子に學問的趣味を興へた事がその五である。神代の信仰を重んじ、建國の神話に憧れたから、日本民族特有な敬神崇祖の觀念を強調し、廣く濫かい純な宗教的情操を喚起した事がその六である。そしてこれ等の事實は、國學が我が思想史若しくは文化史に寄與した大きな功績で、國學の性質を研究する者の特に注意すべき點である。かくて國學が種々な意義を以て、明治維新に及した刺戟と効果とは、再び此所に繰返して述べる必要もあるまい。

日本民族の將來は、その國際的位置と文化的使命との關係から、益、多事であり、多難であり、しかも多望であると言はなければならぬ。この多端な未來に直面して勇往邁進するには、須らくその國民的信念を固くし、傳統的文化を理解して、先づその自主自重の精神を築くべきである。即ち日本精神は常に日本人活動の中心でな

ければならない。我が國今後のかゝる事情から熟慮して、我等は愈々日本心の特色を涵養發揮し、以て皇國の精華を輝かし、人類の幸福を進める覺悟を持つてゐる必要がある。この必要に對しても、國學とその發達の過程とは少からぬ暗示を與へてゐると思ふのである。

一〇 新たなる説を出すこと 本居宣長

新たなる説を出すこと

近き世、學問の道ひらけて、おほかた萬づのとりまかなひさしく賢くなりぬるから、とりくに新たなる説を出す人多く、その説よろしければ世にもてはやさるゝによりて、なべての學者いまだよくもとのほぬほどより、われおとらじと世に異なるめづらしき説を出して、人の耳を驚かすこと今の世の習なり。その中には、ずる

輕桃浮薄

うけはり

ぶんによろしきことも稀には出て來れど、おほかたいまだしき學者の心はやりていひ出づることは、たゞ人にまさらん勝たんの心にて、かるくしくまへしりへをもよく考へあはせず思ひよれるまゝにうち出づる故に、多くはいみじきひがごとのみなり。すべて新たなる説を出すはいと大事なり。幾たびもかへさひ思ひて、よくたしかなるよりどころをとらへ、いづくまでもゆきとほりて、たがふところなく動くまじきにあらずば、たやすくは出さまじきわざなり。その時にはうけはりてよしと思ふも、ほどへて後に今一たびよく思へば、なほわろかりけりとわれながらだに思ひならるゝ事の多きぞかし。

新たにいひ出づる説はとみに人の

うけひかぬこと、おぼ認はない

おほかた世のつねに異なる新しき説をおこす時には、よきあし

うけぬ顔

きを言はず、先づひとわたりば世の中の學者に憎まれそしらるゝものなりあるは、おのがもとよりより來つる説といたく異なるを聞きては、よきあしきを味はひ考ふるまでもなく、初よりひたぶるに捨てゝとりあげざる者のありあるは、心の中にはげにと思ふふしも多くあるものから、さすがに近き人のことに従はん事のねたくて、よしともあしとも言はて、たゞうけぬ顔して過すたぐひもありあるは、ねたむ心のすゝめるは、心にはよしと思ひながら、そのうちのみずをあながちに求め出でゝすべてを言ひけたんとかまふる者もあり。

おほかた古き説をば、十が中に七つ八つはあしきをも、あしき所をばおほひかくして、僅かに二つ三つのとるべき所のあるをとりたてゝ、力の限りたすけ用ひんとし、新しきは十に八つ九つよくても、一つ二つのわるき事を言ひたてゝ、八つ九つよき事をもおし

あげつらひ

けちて、力の限りはわれも用ひず、人にも用ひさせじとする、これはおほかたの學者の習なり。然れども、またまれくには、新たなる説のよきを聞きては、古きがあしき事をさとりて、すみやかに改め従ふたぐひもなきにはあらず。古きをいかにぞや思ひて、かくはありしかとまでは思ひよれども、自ら定むる力なくて、疑はしながらさてあるなどは、新たなるよき説を聞きては、かくてこそはといみじくよろこびつゝ、たちまちに従ふたぐひもありかし。

おほかた新たなる説は、いかによくとも、すみやかに用ふる人稀なるものなれど、よきは年を経てもおのづからつひには世の人の従ふものにて、あまねく用ひらるれば、その時に至りては、初にねたみそしりしともがらも、心には悔しと思へど、おくれればせに従はんもなほねたく人わろくおほえて、こゝろよからずながら、古きをまもりてやむともがらも多かりしか世の中のあげつらひ定まり

て、皆人の從ふ世になりては、初よりすみやかにあらため從ひつる人は、かしく心ざとく思はれ古きにかゝづらひてとかくとこほれる人は、心おそく言ふかひなく思はるゝわざぞかし。

師の説になづまざること

おのれいにしへぶみを解くに師の説とたがへること多く師の説のわろき事あるをば、わきまへ言ふことも多かるをいとおあるまじき事と思ふ人多かんめれどこれすなはちわが師の心にて、常に教へられしは、後によき考の出で來らんには、必ずしも師の説にたがふとてな憚りそとなん教へられし。こはいと尊き教にて、わが師の世にすぐれ給へる一つなり。おほかた古へを考ふること、さらに一人二人の力もて悉くあきらめ盡すべくもあらず、またよき人の説ならんからに、多くの中には誤もなかなからん。必ずわろきこともまじらてはえあらず。そのおのが心には、今は古へのこゝろ悉

く明らかなり、これをおきては、あるべくもあらずと思ひ定めたる事も、思の外に、また人の異なるよき考も出で來るわざなり。あまたの年を経るまに、さきくのうへを、なほよく考へきはむるからに、つぎにくはしくなりもて行くわざなれば、師の説なりとて、必ずなづみ守るべきにもあらず。よき、あしきを言はず、ひたぶるに古きを守るは、學問の道には言ふかひなきわざなり。

またおのが師などのわろきことを言ひあらはすは、いともしかしこくはあれど、それも言はざれば、世の學者その説にまどひて、長くよきを知ることなし。師の説なりとして、わろきを知りながら言はず、つゝみかくして、よざまにつくろひをらんは、たゞ師のみ尊みて、道をば思はざるなり。宣長は道を尊み古へを思ひて、ひたぶるに道の明らかならん事を思ひ、古へのことの明らかならん事をむねと思ふが故に、わたくしに師を尊むことわりの缺けんことをば、え

かへりみたる様なりあるも
 しもかへりみざることあるを、なほわろしともしらん人は、そしり
 てよ。そはせんかたなし。われは人にそしられじ、よき人にならんと
 て、道をまげ古への意をまげて、さてある。わざはえせずなん。これす
 なはちわが師の心なれば、かへりては師を尊むにもあるべくや。そ
 はいかにもあれ。

わがをしへ子にいましめおくやう

われに従ひて物まなばんともがらも、わが後にまたよき考の出
 て來らんには、必ずわが説にななづみそ。わがあしき故を言ひて、よ
 き考をひろめよ。すべておのが人を教ふるは、道を明らかにせんと
 なれば、かにもかくにも道を明らかにせんぞ。われを用ふるには、あ
 りける。道を思はていたづらにわれを尊まんは、わが心にはあらざ
 るぞかし。

—玉かつま—

かにもかくに

大
 中庸論
 孟子

一 一 みくにまなび

平田篤胤

學問には色々ある。その中に何の學問がいつち大きいぞと言ふ
 に、ちと自分勝手のやうなれども、皇國即ち我が國の學問程大きい
 ものではない。御座る。なぜと言ふに、先づ近く儒學と佛學との上で
 申さば、儒者は最初四書五經とか、十三經とかいふ類の書物を讀む
 事を覺え、また左國史漢と言つて、左傳といふもの、國語といふもの、
 史記といふもの、漢書といふものなどをあら／＼讀んで、さて漢文
 を綴る方を覺えたり、そのふだんの口ずさみに詩を作る事でも覺
 えると、もう儒者と言つて通られるが、何のこれしきの書物を讀ん
 で、これしきの事を覺ゆるに、さして難い事は、ありやいたさんで御
 座る。大方世間の儒者は、皆このくらゐなもので御座る。

さてその儒者に比べては、出家の方がよつほど廣い。なぜと言ふ
 に、己が是非讀まねばならぬときめた俗に言ふ經文が五千餘卷、馬



（綱）
おもと



九

（綱）
九

馬

地天
八紘九野
天漢
天の川

につけたならば七八駄あらう。それをみんな讀まず十分の一を讀んだところが、ざつと儒者がおもとと讀まねばならぬ書物の一倍もあるて御座る。そのみならず、儒者は佛書を讀まんでも事が缺けぬによつて、とんと讀まず。たまさか佛書を讀む儒者もあれど、そりや百人に一人もない。僧徒はそれと事かはり、儒者のおもと見る書物をば、子供の時から文字を知る爲に讀んで置く。また詩も漢文も儒者と同じやうに作りもする。そこで僧徒の學問は儒者よりは廣いて御座る。

三

三

蘇 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇

（一）宋の蘇軾の弟
轍。政和二年
（二）西紀一一年
十二月。歿年七
十四。

鈴鹿のきみ
の京にかへ
り給ふころ
りたるに馬
のはなむけ
してはむけ
さむ君に春
雨のさそひ
顔なるわか
れ道やなそ
篤胤

かねて言はばまごついてゐる事が多くある。それ故に、その混雑をつぶさに分けねば、眞の道の有難き所も顯れず、その混雑をより分けて、眞の道の害となる事をいひ顯さうとするに就いては、よく先方の事をも知らねばならず、かの唐人蘇子由といふ者の「善與人言者、因其人之言、而爲之言、則天下之辯者服矣。云々」と申したる如く、此

蘇軾の弟轍の言、
百千度半中は君も春雨の
馬のばおもと

平田篤胤筆蹟

方の事ばかり言つたのではいかず。例へば、僧徒を論ずには佛書で言ふと、ぎうの音も出ず。儒者を論ずには儒書で論ずれば、猫に追はれた鼠のやうに畏まる。されば皇國の純と正しい道を得ようとするには、それに心得なくてはかなはぬ事、御座る。殊にもろくの學問の道、たとひ外國の事にしろ、皇國人が學ぶからは、そのよき

八絃一字

地球と云ふ家の
如く見てせう
て幸福なる文化
持たしむる

博士。國學院
大學教授。明
治六年（二五
三三年）東京
市に生れた。

事を選んで、皇國の用にせうとの事で御座る。さすれば、實は漢土は勿論、天竺、阿蘭陀の學問をも、すべて皇國まなびと言つても違はぬ程の事で、即ちこれが皇國人にして外國の事を學ぶ者の心得で御座る。

—古道大意—

自修文

逆境の恩寵

加藤 玄智

新聞を賣りながら勉強する。牛乳を配達しながら學校に通ふ。いかにもつらい。朝も早く起きなければならぬ。夜も寝るのが遅くなる。雨の日でも雪の夜でも休む事は出来ない。そして勉強といへば、纔かにその前後僅少な時間を利用してなし得るに過ぎない。どうも苦しい。これが華族の若様に生れたなら、富豪の子弟であつたならばと、時々愚痴も出る。女學生にしてもさうである。家が零落して父は既に逝き、母は病身、女中も使はず、臺所の水仕

うぶな者
世の惡風に染
まなれ者
沈淪する
落ちぶれる。

事は言ふに及ばず、幼い弟妹の世話までして學校に出なければならぬ。これが華族のお姫様であつたらばと、時に我と我が身を顧て、不幸の身をかこつ涙も出よう。さあこゝだ。考へ直さなければならぬところはこのさうだ。さういふ逆境が、却つて本當の人物を作り上げてくれるものである。いはゆる艱難汝を玉にすて、順境にあつてしたい放題の出来る者は、遂に身を誤り易い。朝寢坊をする。毎日學校も遅刻をする。金も多少は自由になるところから金づかひも荒くなる。やれ活動寫真だ、やれ芝居だと勝手に遊び歩く。世間にはさういふうぶな者を引つかけようとして、網を張つて待つてをる惡魔が澤山ある。遂に墮落に墮落を重ねて、救ひ難い人生の深淵に沈淪し、有爲の一生を棒に振つてしまふ者が少くない。かういふのは、その人個人の不幸と言ふばかりでなく、國家の立場からも大きな損失である。勿論、順境にある者が皆々さうといふ譯ではないが、動もすればさういふ魔の誘惑に罹り

盤根錯節云々
「不遇盤根錯節何以別利器乎」(後漢書)
 古人
支那南北朝時代の宋人范曄後漢書の撰者
 儋石の儲すこしのたくはへ。



平田篤胤

易い。これに反して逆境にある者は、生活に餘裕が少い。腕一本、脛一本でし上げなければ、獨り自分の一身が立ちゆかないばかりでなく、父母兄弟をも窮境に陥れる虞がある。どうしてもそんな優長な事をしてはをられない。自分だけでもどしどし勉強して、早くし上げてしまはなければならぬ。平田篤胤は、學士にして眞面目である。田篤胤分に眞劍味を帯びてをる。石に嚙りついてても成功しなければならぬといふ生存上の必要が、ひし／＼と身に迫つて來てをる。この眞面目。この眞劍味。これが實に人を成功に導く偉大な原動力である。盤根錯節に遇はずんば何を以て利器を別たんや」と言つた古人の言實に我を欺かぬのである。我が國學の大家平田篤胤翁が、家に儋石の儲もなく、僅かに醫を業

蘊奥
學問技藝などのおくそこ。

嶄然
一段高く抜き出たさま。

頭角を見す
才學が群にすぐれあらはれ出るに言ふ。

黽勉
つとめはげむこと。

大器を晩成する
大才をおそく作り上げる。
(一)秀忠の第四子會津松平家の祖。寛文十二年(一七二二)歿。年六十二。

として生計を支持し、傍ら國學の蘊奥を究め、以て嶄然斯界に頭角を見したのも、一にその逆境の賜である。翁は古道の闡明にこれ日も足らずして、僅かな時間でも惜しんで勉強された爲、花鳥風月の目を喜ばし耳を樂しましめる物をも、十分賞玩する餘裕がなかつた。これ翁に花鳥風月を詠じた歌の見るべきものが少い所以であらう。或時翁はこの感懷を述べて

月花をわれもあはれと見てはあれど
 あはれと歌ふひまなかりけり

と言つてをる。以て翁が貧賤の中から黽勉學にいましまれ、以てその大器を晩成された苦心が想見されるのである。山崎闇齋が會津侯保科正之に答へて、自分には人の得知らぬ三つの樂しみのある事を告げ、その第一は、禽獸に生れずして人間と生れた事、第二は、幸に亂世兵馬の間に生れずして生を泰平の御世に享け、靜かに古書を繙いて古聖前賢とその心交を縦にする事を

拮据 身體を勞し働くこと
先王の道 昔の聖王のとなへた道

諷諫 遠まはしにいさめる。それとなくいさめる。

這般 この。

天公配劑の妙 天帝(造化の神)のくばりあはせのたくみなこと。
(一)作者不詳。塞翁の馬とウマくをにかけてある。

得る事、第三は、王侯の家に生れて婦人の手に成長し、無意義な一生を過す事なく、幸ひにも貧困に生れて拮据^{きつぎま}勉強、辛苦を嘗めて學問をし、先王の道を學ぶ事を得た事、さうしてこの三樂中、最後の一樂こそ實に貧賤に長じた者の天與の特權であると喝破^{かつぱ}し、以て會津侯を諷諫^{ふうかん}したと言ふのも、また這般^{しやはん}の消息をよく傳へてをる。獅子は己の生んだばかりの子を、先づ千尋^{ちひろ}の谷底に蹴落して、艱難に處する訓練を子獅子に與へるとの事である。かくして百獸の王となる資格も自然養はれるのである。順境の生む悲喜劇、逆境の與へる天惠、達觀し來れば、眞に天公配劑の妙に驚かざるを得ない。

(一) 世のなかは何につけても塞翁のうまくは行かぬものところ知れ
しかもこのうまく行かぬところに妙味があり、大宇宙の深い教訓が含まれて居り、未來の偉人を生出す眞の訓練が存してをる。

(一) 新約聖書、ロマ書第五章。

(二) 孟子告子章句下。

拂亂^{おとろ}す 逆らひ亂す。
曾益^{そうえき}す だん／＼ふや

(三) 作者不詳。

使徒ポロは、この點に關する自己の體驗を左の如く述べてをる。眞に味はふべきである。

(一) 艱難にも喜をなせり。蓋し艱難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生じ、希望は恥を來らせざるを知る。

支那の賢哲孟子はまた左の如く説いてをる、

(二) 天の將に大任をこの人に降さんとするや、必ず先づその心志を苦しめ、その筋骨を勞し、その體膚を餓^うし、その身を空乏にし、行^{おこなひ}そのなすところに拂亂^{おとろ}す。心を動かし性を忍んで、その能くせざるところを曾益^{そうえき}する所以なり。

と。古歌に曰く、

(三) うき事のなほこの上につもれかし
かぎりある身のちからためさん

道隆 伊弉 道隆 伊弉

第六十五代花山天皇。天皇は御譲位後花山院に御あらせられた。さういふし

むづかしげ けしき覚ゆ

藤原道長

さる所おはします帝 藤原道隆 道長の長兄 藤原道兼 道長の仲兄 道 びんなき事

華山天皇

御堂關白有明

梅雨

花山院の御時に五月下つ闇に五月雨も過ぎていとおどろおどろしくかき亂れ雨のふる夜帝さういふしくや思し召しけん殿上に出でさせおはしまして遊びおはしましたしけるに人々御物語申しなどし給ひて昔恐しかりける事どもなどに申しなり給へるに「今宵こそいとむづかしげなる夜なめれかく人がちなるにだにけしき覺ゆましてもの離れたる所などいかならんさあらん所に一人いなんや」と仰せられけるに「えまかち」とのみ申し給ひけるを入道殿は「いづくなりともまかりなん」と申し給ひければ「さる所おはします帝にて」と興ある事なりさらば行け道隆は豊樂院道兼は仁壽殿の塗籠道長は大極殿へ行けと仰せられければよその君たちにはびんなき事をも奏してけるかなと思ふまた承らせ給へる殿

ハ〇 公御殿上人の伺候しるさる者禁中清涼殿の二室

入りゴメ

後工合の事い

天香

朱書

白書

龍口(皇舟)

北面(洗)

帯刀(皇舟)にがむく

子四つ

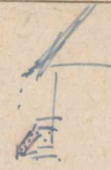


御堂關白(松岡映丘筆)

ばらは御氣色變りて益なしと思したるに入道殿は「さういふ御氣色もなくして私の従者をば具し候はじこの陣の吉上まれ瀧口まれ一人昭慶門まで送れと仰言たべそれより内には一人入り侍らん」と申し給へば「あかしなき事」と仰せらるゝに「げにとて御手箱におかせ給へる刀申して立ち給ひぬ今二所もにがむく他の三人

にがむく各おはしましぬ 子四つと奏してかく仰せられ議する程に丑にもなりにけん道隆は右衛門の陣より出でよ道長は承明門より出でよとそれをさ

(一)道隆。
すちなし
(二)道兼。



へわかたせ給へば、しかおはしましあへるに、中關白殿陣まで念じて、おはしたるに、宴の松原の程に、その物ともなき聲どもの聞ゆるに、ずちなく帰給ふ。栗田殿は露臺の外まで、わななくわななくおはしたるに、仁壽殿の東おもてのみぎりの程に、簷とひとしき人のあるやうに見え給ひければ、物も覺えて、身の候は、こそ仰言も承らめ。とて、各立歸り参り給へれば、御扇をたゞきて、笑はせ給ふに、入道殿はいと久しう見えさせ給はぬを、いかゞと思し召す程に、ぞいとさりげなく、事にもあらずげにて、参らせ給へる。いかに、と問はせ給へば、いとどかに、御刀にけづられたる物を取具して、奉らせ給ふに、こは何ぞと仰せらるれば、たゞにて歸り参りて侍らんは、あかし候まじきによりて、高御座の南おもての柱のもとを削りて候なり。とつれなく申し給ふに、いとあさましう思し召さる。こと殿たちの御氣色はいかにもなほ直らて、この殿のかくて参り給へ

新東亜建設

(一)倫理學者、
帝國大學、
教授、
生年(二)長野縣、
年(三)明治、
に(四)二五、
に(五)二五、
に(六)二五、
に(七)二五、
に(八)二五、
に(九)二五、
に(十)二五、



小原健味

るを、帝よりはじめ感じの、しられ給へど、羨ましきにや、またいかなるにか、物も言はてぞ候ひ給ひける。なほ疑はしく思し召されければ、つとめて、藏人して、けづりくづを遣して見よ。と仰言ありければ、もて行きて、おし附けて見たらうびけるに、つゆたがはざりけり。そのけづりあとは、いとけざやかに侍るめり。末の世にも見る人は、なほあさましき事にぞ申し、かし。

新東亜建設

一三 自覺の徹底

吉田 靜致

我等は眞の現代と皮相の現代とを區別しなければならぬ。精神生活の必須の要求に基づいて出て來つた新運動は眞の現代の特色をなしてゐるものである。ところが、かゝる要求からなく、唯變化を好むといふやうな極めて淺薄な理由によつて起る新運動がある。人間は變化を好む者である。しかし、その變化に對する淺薄な

物質發展論

要求から生じた新運動の如きは、決して現代を作らない。眞の現代を作るものは、我々の心の奥底にある精神生活の要求から生じた新運動でなければならぬ。しかして、かゝる新運動、即ち眞の現代の爲にするものは、偽の現代の皮相的のものから、明確に區別されねばならぬ。眞の現代は、偽の現代に勇敢に反對してこれをうち滅さなければ、決して發展させる事は出来ない。即ち、眞の現代を實現せんと欲するならば、偽の現代を征服する事によつて、始めてその目的を達し得るものである。事を覺悟しなければならぬ。その物質的にのみ趨る傾向を打破して、精神生活といふものに注意を向け、眞の現代を造り出さなければならぬ。これ即ち自覺の徹底を叫ぶ所以である。いかなる場合にあつても、我々は精神生活を基とし、本當の我を發揮しなければならぬ。かくて、一たびその本當の我といふ事に想ひ到れば、茲に人間の尊嚴な事を認めざるを得ない。人格の

自我實現論

モミワアーント氏

偉大な事を認めざるを得ない。

私は今日の日本の思想界の状態に就いて、三つの大きな缺陷を認めるのである。第一は、人間の尊嚴といふ事を餘り考へてをらぬ事である。第二は、自發的態度に乏しい事である。唯、外からかうするものだと言はれて、その眞意義の何たるを解せず、盲目的に動いてゐるのは宜しくない。須らく自ら進んで、自發的態度に立たなければならぬ。一方に於ては、人間の尊嚴といふ感じが少く、さうして、それに関聯して自發の念が乏しいのである。第三には、敬虔の念に缺けるところがある事である。事を行ふに當つては、唯利害にのみ拘つて實行してはならぬ。我の中に看出される第一我から現れて來る最高の意味に於ける良心の命令を衷心より重んじて、これを實行するといふ態度に立たなければならぬ。しかも、とかくに利害によつてのみ事を行ふ者が多いが、これは皆敬虔の念に乏しい結果

肉體的衝動の
奴隸

である。

人間の尊嚴とか、自發の態度とか、或は敬虔の念とかいふ事は、私の考へるところでは、徹底せる自覺から當然生じて來る事である。第一我を自覺するに至らんか、私の極めて尊嚴な所以を知る事が出來る。決して我を物慾の奴隸とする事は出來ない。肉體的衝動の奴隸とする事は出來ない。その他種々の關係に於て、人間の尊嚴といふものが現れて來れば、道德上偉大な力となるのである。さうして、第一私の衷心の要求に基づいて種々の事を實行し、他よりあてはめられた規則によつて、嫌々ながら動くといふやうな事ではなく、我自ら進んで善を實行するといふ自發の態度は、實にそれから生じて來る。

同じく國民道德を實行するに當つても、これは當然國民として進んで實行すべきものであるといふやうに、自發の態度に立つて

これを行ふのでなければ、この物に生命ある道德といふ事は出來ない。外部よりの規則によつて行つたといふだけでは、いかにその事が美しい形であつても、眞の生命ある道德はそれより生じない。やはり第一我たる私の本質その物の要求よりして、自らこれを求めて來るといふ自發の態度に立つて、始めて眞の道德が成立つのである。これによつて、敬虔の念といふものも自然に生じて來るのである。唯外の形式に囚はれて動くのではない。第一我たる精神の命ずるところ、國家社會と一體たる眞私の命ずるところに對する敬虔の念が、根柢となつてゐるのでなければ、到底眞の道德となる事は出來ないのである。さういふ事は、皆徹底せる自覺よりして生ずるのである。

——道德の根本義——

(一)評論家、思想家、文學博士。山形縣の人。明治三十五年(二五六年)歿。年三十二。

一代の宗師
百世の儀表

(二)伽比羅衛とも書く

四門人迹

成道

悟りまかす

正覺

巡錫す 教化を行く

(三)ガンジス河の支流。

一四 世界の四聖

高山林次郎

生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる。聖人にあらざれば、誰かこれを能くせんや。釋迦、孔子、ソクラテス、キリストの四人、世呼んで世界の四聖と稱す。宜なるかな。

釋迦は西曆紀元前凡そ六百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生る。父は淨飯王、母は麻耶夫人。その本名は悉達多といふ。釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀はその出家成道後の尊號なり。釋迦、身は一國の太子に生れけれども、夙に思を人生の問題に潛め、二十九の歲、その妻子を棄て、王城を遁れ、山林に隠れて道を修むる事六年、終に人生の奥義を究め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、北天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘歲にして跋提河の畔に歿しぬ。今の佛教は即ち釋迦一代の教訓に基づく。蓋し釋迦の當

経路を待たぬ

元々人民

歸命の大道

南無り歸命り頂礼

礼する

心と打込

一世の木鐸となる

指導者

時、印度には幾多の哲學ありき。されど徒に思索の高遠を喜びて、人生の疑問に適切ならず。偏に幽玄なる談理と慘憺たる苦行とによりて、安心の道を求めたり。その流派を樹て、相争ふところは、畢竟名目の優劣のみ。未だ一世の元々をして歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生れ、その浩大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て一世の木鐸となり、民をしてその歸依するところを知らしめたり。



釋迦

孔子、名は丘、孔子はその尊稱なり。今を去ること二千四百餘年の昔、支那の魯國に生る。幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃より魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へて夙に令聞あり、學徳愈進む。魯の定公の時に至り、擢てられて大司寇の職に就く。治績大いに舉り、内

青
帝國讀本 卷九

風采を想望す

門下の高足

蕩然として地を拂ふ

教化の陵夷

狂瀾を既倒に廻らす

外その風采を想望す。時に齊王、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀

を構へ、定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて、四方の遊説を試みぬ。當時の支那はいはゆる春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を拂へり。



孔或は臣にしてその君を弑する者あり、或は子にしてその親を害する者あり、強は子弱を呑み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頽廢、未だ曾

てこの時の如きはあらず。孔子既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出て、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に廻らさんとす。志や高且大なりと謂ふべし。かくの如くにして四方に漂浪すること十三年、時非にして道容れられず、世また耳を名教に傾くる者な

老脚蹉跎

(一) 衛の人。孔門十哲の一。

下學して而して上達す

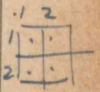
(二) 西紀前四七〇年—三九九年の都府。
(三) 古代ギリシヤ

詭辯學派

し。是に於て已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く、

「嗚呼、吾が道遂に窮す。世遂に吾を知る者なきか」と。門弟子貢慰めて曰く、「何ぞ夫子を知る者なからんや。孔子答へて曰く、「天を怨みず、人を尤めず、下學して而して上達す。吾を知る者はそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや」と。後幾許もなくして歿す。時に年七十三。

(二) ソクラテスはギリシヤのアゼンス府に住める一彫刻師の子なり。その生れたるは凡そ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦、孔子と年を隔つること二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出でたるは奇なりと謂ふべし。ギリシヤの當時はいはゆる詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の争に止り、道德は空文の上へのみ貴ばれたり。その状、なほ釋迦當時の印度の如く、學問は人生社會の實際に關して殆ど裨益するところなかりき。ソクラテス



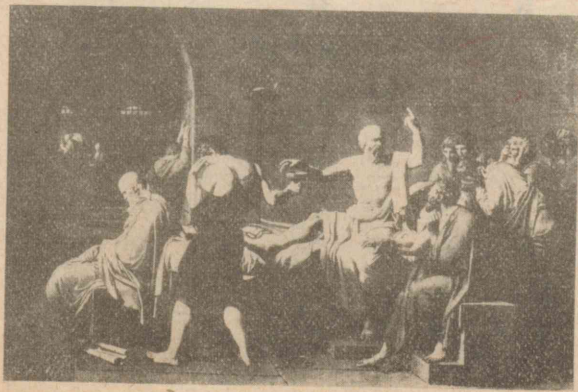
諄々として倦
ます
侃諤の正義

喬木は風に折
らる

讒訴す

は慨然として時弊の救済を以て自ら任じ、盛に道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭辯學者の輩に遇へば、則ちその獨得の論法を以て辯難攻撃して、一步も假借せず、侃諤の正義その稀代の雄辯と相俟ちて一世を風靡せり。

然るに「喬木は風に折らる」といふ喩に漏れず、群小のソクラテスに快からざる者相謀りて、國法に背ける者としてソクラテスを讒訴せり。その訴狀に曰く、「ソクラテスは國教を信ぜずして異教を創め、以て人心を惑亂せり。宜しく國法によりて死刑に處すべし」と。ソクラテスがこの讒訴に對する抗議は、實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の



ステラクソン

不遜

吾人は恐怖によつて
宗教を創む

何爲るものぞ

(一)ギリシャの醫
藥の神。アポ
ロの子。
謝を致す

(二)イギリスの委
任統治國パレ
スタインの首
都イェルサレ
ムの南約八キ
ロメートルハキ

至誠を以て國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるはなし。然れども判官はソクラテスを以て傲慢不遜なりとなし、死刑を宣告せり。ソクラテス泰然として驚かず、曰く「命のみ」と。その獄中にあるや、常に門弟子を集めて、生死、靈魂未來の事を説き、人の脱獄を勸むる者に對しては、乃ち答へて曰く「余は唯正義に導かれんのみ。死とていへばまた何爲るものぞ。人生の幸福は靈魂の上にあるを知らずや」と。終に從容として毒を仰いで歿す。將に歿せんとするや、弟子遺言を求む。ソクラテス曰く「爾一雞を以てアスクレピアスの神に捧げよ」と。蓋し曾て病みし時平癒を祈りて謝を致す事を忘れしが爲ならん。ギリシャの聖人ソクラテスはかくの如くにして逝きぬ。年七十。

キリストは本名をヤソと言ふ。キリストとは膏灌アブラハムがれたるものといふ義にして、教徒の奉れる尊稱なり。ユダヤのベツレヘムに生る。その生後四年を以て西曆紀元第一年と成す。父はヨセフと呼べ

寧日なし

收斂

放縱の俗

救世の使命

り。賤しき木匠大工にして、母をマリヤといふ。長じて三十歳の頃、預言者
 ヨハネの洗禮を受けて、始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間ユ
 ダヤの各地を歴遊し、諸の迫害に屈せずして、その福音を傳へたり。
 抑、當時はローマ帝國の榮華正にその極に達し、禍亂の萌芽内に胚
 胎し、災異頻りに至りて、天下寧日なし。殊にキリストの故國たるユ
 ダヤは、久しく暴君の收斂ウツクに疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒
 に珍奇なる淫祠イナヅカを崇拜して益、放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄び、
 て空しく人を惑はすのみ。是に於て一世の人心は、悉く偉人の現出
 して、この暗黒なる社會を照破せん事を渴望せり。キリストこの間
 に生れ、自ら救世の使命を負へる神の子と稱し、昂然としてその偉
 大なる新教理を宣傳せり。遠近靡然としてこれに赴く。僧侶學者、官
 吏等はこれを喜ばず、以て猥りに新法異説を唱へて民を迷はす者
 なりとなし、キリストを捕へて磔殺ウツクの刑に處す。キリスト豫めこの

晏然

事あらんを慮り、晏然ウツクとして騒がず、靜かに祈りて曰く、「神よ、彼等を
 赦せ。彼等はその爲すべきところを知らざればなり」と。その刑場に
 赴くや、路傍に哀哭する女子を顧て曰く、「イエルサレムの女子よ、吾が
 爲に哭く事勿れ。唯己ウツクと己の子との爲に哭け」と。かくの如くしてキ



キリスト

リストは三十三年の短命を以て、十字架
 上の露と消え去りぬ。キリストの死後、そ
 の弟子等は激烈なる迫害に抵抗して、そ
 の教を天下に弘む。キリスト教即ちこれ
 なり。

轆轤不遇

以上は四聖の略傳なり。その人物、事蹟の高大にして雄偉なる、永
 く後人の景慕し、崇拜すべきところなり。四聖のうち釋迦を除きて
 は、何れも轆轤不遇ウツクの裡にその生を終へたり。孔子は志を四方に得
 ず、その經綸を抱いて空しく咏歎の間に歿せり。ソクラテスとキリ

無上の罪をあついで

ストとは何れも讒奸（ま）の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に磔殺せられたり。悲惨なりと謂ふべし。然れどもこれ等の人々の志すところは天下後世にあり、現世の禍福と一身の安危とは、毫もその顧慮するところにあらず。故にその死に就くや、晏然として猶歸するが如し。孔子はその身の不幸を憂へずして、却つて「吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えん」と嗟歎せり。釋迦は衆生の爲に妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテスは死罪の脅



高 山 林 次 郎

迫に遇うて、揚言して曰く、「正義を信ずる者に取りて、死はた何爲るものぞ。吾をして一日の生あらしめんか、その一日即ち國民の迷を覺さざるべからず」と。キリストは己を罪に陥るゝ者の爲に神に祈りたり。嗚呼、何ぞその慈悲の浩大にして無邊なる。——櫻牛全集——

(一) 詩人。名は淳介。明治十年(一九三七年)岡山縣に生れた。

一五 石彫獅子の賦

(一) 薄 田 泣 堇

童子（うなみ）に問へば石工（いしきり）は、木かげに夢を結びぬと。
入りて小暗き仕事場に、刻みさしつる唐獅子の
圓き頸（うぶ）をかきなで、誰ぞ、もの思ふは、ひそやかに。

朽木の棚にすゑられて、顔くすぼるゝあら彫の
豕狗（しこ）兒、野の狐、さてはを鹿のむらがり
こはめざましき誇かな、日かげにぬるゝ獅子の影。

裂けたる岩に爪かけて、雄々しいかその姿
たてがみ長く背にまきて、見れば涌きよる春の潮。

胸はゆたかに力男が

ひきしぼりたる弓のごと。

忿怒現ずる明王の

ひろき肩より燃えあがる

焰かながき尾は躍り、

にこ毛密なるあなうらは、

いざよひ薔薇の花ふむも、

巢くへる鳥は目ざめまじ。

心がまへのいみじさや、

瞳子彫られぬ唐獅子は、

光を知らぬ盲目の身、

鼻かぐはしき香を嗅ぐも、

いまだ前脚ふみあげて、

花野の路はしだかじな。

鑿の手またく捨てられて、

御苑の夏のあけぼのや、

緑したゝる木のかげに、

巨人の如く立たんとき、

雄姿いかに背に伏して、

しばし想像にふけらまし。

二

汝の王者かたどられ、

眞白き石に刻まれぬ。

野より山より林より、

つどへよ獸列なりて

蹄の前にひざまづき、

弱きを恥ぢて僕たれ。

おほき靈魂くだり来て、

眞白き石に包まれぬ。

野より山より林より、

つどへよ獸列なりて

その光輝にぬれぬべく、

蹄の前にひれふせよ。

無上の權威あらはれて、

眞白き石に具せられぬ。

野より山より林より

つどへよ獸列なりて

王にさゝぐる燔祭の

聖き火蓋を整へよ。

斑の牛とかもしかは、
焰のうちに身を投げよ。
高きほまれは汝にあり、

ふかき痛手に甘んじて、
誇るべきかな犠牲の
羨む群ぞおろかなる。

見よ犠牲はそなはりぬ、
ながき流をふるはせて、
勝と力の權化なり、

獅子は額にたてがみの
あな起ちあがる「戦闘」と
伏せよ」と呼べば皆伏しぬ。

さかんなるかな、その言葉、
人は魔のごと強からず、
値の源ぞ、わづらひと

「神は死ぬめり」とことはに、
われは王者ぞ、萬有の
もだえの胸のあるじなり。

あゝ運命の眩きをも、

眼ひらきてながめ入り、

胸わなゝかぬ雄心の
勝利のおもひに漲れる、

若き勇氣に溢れたる、
この身この世に何の死ぞ。

絶ゆることなき永遠よ、
聲はらつばの音に似たり。
たかき讚美の服従は、

われは汝の伴なり」と、
時に黙止はやぶられて、
雷のどよみに現れぬ。

三

いま想像の羽たゆむ。
ふくよかにまた静かなる
石彫ながく傳はりて、
あゝ藝術は支配せよ、

見れば唐獅子目を浴びて、
すがたいかなる誇ぞや。
榮とならんは幾千歳。
とはの生命ぞ汝にある。

— 泣菫詩集 —

一六 東下り 悲し様な淋し様な持

昔男ありけり京にありわびて東に行きけるに伊勢尾張の間の海づらいを行くに浪のいと白くたつを見て、

いととしく過ぎにし方のこひしきに 自分は、つかへるなみかな

うらやましくもかへるなみかな

となん詠めりける。

昔男ありけり。その男、身を益なき者に思ひなして、京にはあらず、

東の方に住むべき國もとめにとて行きけり。信濃國淺間の岳に烟

のたつを見て、

しなのなる淺間の岳にたつけぶり

をちこち人の見やはとがめぬ

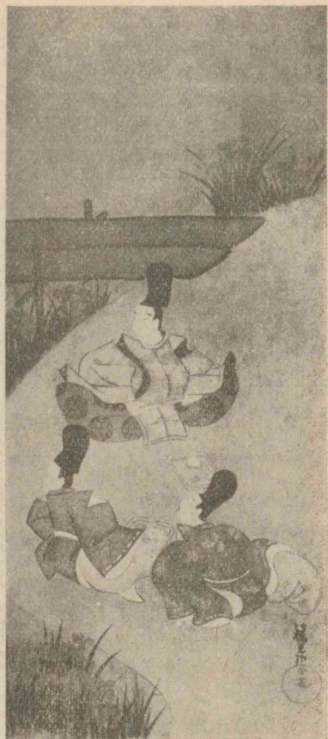
もとより友とする人、一人二人して行きけり。路知れる人もなく

ゆはまづしは

自分は、つかへるなみかな

かきつばた

て惑ひ行きけり。三河國八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋と言ふことは、水のくも手に流れ分れて、木八つ渡せるによりてなん八橋とは言ひける。その澤の邊の木蔭におりゐて



八橋 (尾形光琳筆)

燕子花いと面白く
咲きたり。それを見
てある人のいはく、
「かきつばたといふ
五文字を句の上に
すゑて、旅の心を詠

め」と言ひければ詠める、永くつれもて来た事か

から衣、きつ、馴れにしづまじあれば

はるく、來ぬる、たびをしぞ思ふ

と詠めりければ、皆人、餉の上に涙落してほとびにけり。

(一)安倍郡と志太郡との境。

行きく〜て駿河國に至りぬ。宇津の山に至りて、我が入らんとする路は、いと暗う細きにつた、かづらは茂りてもの心細く、すゝろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり「かゝる路にはいかでかおはする」と言ふに見れば、見し人なりけり。京にその人の御許にとて、文書きてつく。



(筆琳光形尾) 士 富

富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降り。あはぬなりけり。

時しらぬ山はふじの嶺いつとてか
かのこまだらに雪の降るらん

駿河なる
うつの山邊の
うつゝにも
夢にも人に

鹽尻
塩田、砂を
塚の掃い、み
あけとも、

その山はこゝにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらん程して、なりは鹽尻のやうになんありける。なほ行きく〜て、武藏國と下總國とのなかに、いと大きな河あり、それを角田河と言ふ。その河の邊に群れるて、思ひやれば、限りなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守はや舟に乗れ、日も暮れなんと、言ふに、乗りて渡らんとするに、皆人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりしも、白き鳥の嘴と脚とあかきしぎの大ききなる、水の上に遊びつゝ、魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人見知らず。渡守に問ひければ、これなん都鳥と言ふを聞きて、

名にしおはゞいざこと問はん都鳥
わが思ふ人はありやなしやと
と詠みければ、舟こぞりて泣きにけり。

— 伊勢物語 —

一七 月草の花

(一)藤原道平。
こたみ

氏長者

同族の中心なる小引いた
家の長

(二)元弘三年。(一
九九三年)

むくつけき様

さて都には、伯耆よりの還御として、世の中ひしめく。先づ東寺に入
らせ給ひて、事ども定めらる。二條の前の大臣召ありて、参り給へり。
こたみ内裏に入らせ給ふべき儀ことさらめきてあるべけれど、
璽の箱を御身にそへられたれば、唯遠き行幸の還御の儀式にてあ
るべき由定めらる。關白を置かるまじければ、二條の大臣、氏長者を
宣下せられて、都の事管領あるべき由承る。天の下唯この御計らひ
なるべしとて、このひとつあたり喜びあへり。

六月六日、東寺より常の行幸の様に内裏にぞ入らせ給ひける。
めでたしとも言葉なし。こぞの春いみじかりしはやと思ひ出づる
も、たとしへなし。今も御供の武士どもありしよりはなほ幾重とも
なくうち圍み奉れるは、いとむくつけき様なれど、こたみは疎まし



六衛尉



鬮波袍
ワキアテマエ

うちつけめ

警見の威光

(一)名和長年。

ゆすりみつ

くも見えず、たのもしくて、めでたき御守かなと覺ゆるも、うちつけ
めなるべし。世の習時につけて移る心なれば、皆さぞあるらし。先陣
は二條富小路の内裏に著かせ給ひぬれど、後陣の兵はなほ東寺の
門まで續き控へたりきとぞ聞えしは、誠にやありけん。正成もつか
うまつれり。
かの名和の又太郎は伯耆守になりて、それも衛尉の者どもにう
ち交りたり。珍しく様かはりて、ゆすりみちたる世の氣色、かくもあ
りけるをなどあさましくは歎かせ奉りたりけるにかと、めでたき
につけても、なほ前の世のみぞゆかしき車など立ち續きたる様、あ
りし御下りには、こよなく優れり。物見ける人の中に、
昔だにしづむうらみをおきの海に

なみたちかへる今ぞかしこき

昔の事など思ひあはするにやありけん。金剛山なりし東の武士ど

(一)漢の高祖が秦宮に入つた時を指す。

(二)藤原禰子。

も、さながら頭を垂れて参りきほふ様漢のはじめもかくやと見えたり。

(二)礼成門院もまた中宮と聞ゆ。六日の夜やがて内裏に入らせ給ふ。いにし年御ぐしおろしにき。御惱なほ怠らねば、いつしか五壇の御修法始めらる。八日より議定行はせ給ふ。昔の人々残りなく参り集ふ。十三日大塔の宮都に入り給ふ。この月頃に御ぐしおほして、えも言はず清らかなる男になり給へり。唐の赤地の錦の御鎧直垂といふ物奉りて、御馬にてわたり給へば、御供にゆゑしげなる武士どもうち圍みて、御門の行幸なりしにも、ほとく劣るまじかめり。速に將軍の宣旨を蒙り給ひぬ。流されし人々程なくきほひのぼる様、枯れにし木草の春に逢へる心地す。その中に季房の宰相入道のみぞ、あづかりなりける者の情なき心ばへやありけん。東のひしめきのみまぎれに失ひてければ、兄の中納言藤房は歸りのぼれるにつけて

塵を出づ
眉を開く

(一)江戸時代の名は杉文豪。本名は森保九。享和二年(一八〇一)三月八日歿。享年七十四。
(二)明末の人。鄭芝龍。永曆二年(一六五二)年西暦一六五三年歿。享年六十一。
(三)康熙元年(一六六二)年歿。享年六十二。

Kobayashi

も、父の大納言、母の尼上など歎盡きせず、胸あかぬ心地してけり。
四條中納言隆資といふも頭おろしたりし、また髪おほしぬ。もとより塵を出づるにはあらず、かたきの爲に身を隠さんとて、かりそめに剃りしばかりなれば、今はた更に眉を開く時になりて男になれらん、何の憚かあらんとぞ、同じ心なるどち言ひあはせける。天台座主にていまし、法親王だにかくおはしませば、まいとぞ。誰にかありけん、その頃聞きし、

すみ染の色をもかへつ月草の
うつればかはる、花のころもに
— 増鏡 —

一八 千里が竹

近松門左衛門

船路の末も知らぬ火の筑紫は雲に埋めども、あとに擁護の神風や、千波萬波を押切つて、時もたがへず親子の船、唐土の地にも著き

(一)明朝の將軍。後、韃靼に内應し、明帝を弑した。

(二)明朝の忠臣。司馬大將軍。西紀一六七八年歿。

(三)明の熹宗の時。西紀一六二五年。錦祥女。甘輝の妻。

(四)明の將軍。初め韃靼に降り、後、鄭芝龍に應じた。

(五)鄭成功。國姓爺といふ。

にけり。鄭芝龍一官は、故郷へ歸る唐錦、裝束引きかへ妻子に向ひ、「我が本國と言ひながら、時移り代變り、天下悉く李蹈天が引入れて、韃靼夷の奴となり、昔の朋友、一族とて、誰を尋ねんやうもなく、司馬將軍吳三桂が、生死の様子も知れざれば、何を以て義兵の旗を揚げ、いづくを一城に立籠るべき所もなし。然るに某去る天啓五年、この國を立退き日本へ渡る時、二歳になりし娘の子を、乳母の袖にすて置きしが、その子が母は産落して當座に死す。かくいふ父は、八重の汐路の中絶えて、いつ父母も知らぬ身が、育てば育つ草木の、雨露の恵に長ずる如く、天地の父母の助にや、成人して今五常軍甘輝といふ大名、一城の主の妻となれる由、商人の便りに聞及ぶ。頼む方はこればかり、親を慕ふ心あつて娘さへ承引せば、婿の甘輝もやすくと頼まるべし。これより路の程百八十里、うち連れては人も怪しまん。我一人路をかへ、和藤内は母を具し、日本の漁船の吹流されしと、

(一)支那湖北省嘉魚縣。

(二)蘇東坡。

たづきも知らぬ

ほうど我をぬかす

頓智を以て人家に憩ひ、追ひつくべし。これより先は、音に聞ゆる千里が竹とて、虎の栖む大藪あり。それを過ぐれば潯陽の江、これ猩猩の栖む所。風景聳えし高山は赤壁とて、昔東坡が配所ぞや。それよりは甘輝が在城獅子が城へは程もなし。その赤壁にて待ちそろへ、萬事をしめし合すべし」と、方角とても白雲の、日影を心おぼえにて、東西へこそ別れけれ。

教に任せ和藤内、人家を求め忍ばんと、かひなくしく母を負ひ、たづきも知らぬ岩巖石、古木の根ざし瀧つ波、飛越え跳越え、飛鳥の如く急げども、末はてしなき大明國、人里絶えて廣々たる、千里が竹に迷ひ入る。和藤内ほうど我をぬかし、「なう母ぢや人、この脛骨に覺えあり、もう四五十里も來ませうが、人にも猿にも逢ふ事か、行けば行く程藪の中、うむ、わかつたり、方角知らぬ日本人、唐の狐がなぶるよな。魅さば魅せ、宿なし旅の行きつき次第、小豆の飯の相伴」と、根笹、大

讀めたり

(一)「虎嘯而谷風至。龍舉而景雲屬。」(淮南子)
(二)管の人。十四歳の時赤手で虎を搏つて父の難を救つた。

竹押分け踏分け、なほ奥深く行く先に怪しや數萬の人聲、攻鼓、攻太鼓、らつば、ちやるめら高音をそらし、ひようくとこそ聞えけれ。すは我々を見咎めて、敵の取巻く攻太鼓か、または狐のなす業か。と、茫然たるそのをりふし、空凄じく風起り、砂を穿ちどうと、竹葉さつと巻立て、吹折る竹は劍の如く、凄じなんども愚かなり。和藤内ちつとも臆せず、讀めたり、さては異國の虎狩な。あの鐘、太鼓は勢子の者。此所は聞ゆる千里が原、虎嘯けば風起る、猛獸の所爲と覺えたり。二十四孝の楊香は、孝行の徳に因つて、自然と逃れし惡虎の難。その孝行には劣るとも、忠義に勇む我が勇力、唐へ渡つて力はじめ、神力益、日本力、刃で向ふは大人氣なし。虎は愚か、象でも鬼でも一挫ぎと、尻ひつからげ身繕ひ、母を圍うて立つたるは、西天の獅子王も、畏れつべうぞ見えてける。

案にたがはず吹く風と、共に暴れたる猛虎のかたち、藤根に面を

いがみ懸る

ふいがう(韃)

すりつけ、岩角に爪磨きたて、二人を目がけいがみ懸るを事もせず、弓手に撲り馬手に受け、もぢつて懸くれば身をかはし、撓めばひらりと乗移り、上になり下になり、命競べ根競べ、聲を力にえいえい。虎の怒毛、怒聲、山も崩る、如くなり。和藤内も大童、虎も半分毛をむしられ、兩方共に息疲れ、石上に突つたてば、虎も岩間に小首を投げ、大息ついたるその響、ふいがう吹くが如くなり。

母藪蔭より走り出て、やあ、和藤内、神國に生れて、神より受けし身體、髮膚、畜類に出で合ひ、力立して怪我するな。日本の地は離るるとも、神は我が身にいす、川、大神宮の御祓、納受などかなからんや。と、肌の護符を渡さるれば、げに尤も。と、押戴き、虎に差向け、差上ぐれば、神國神祕のその不思議、猛りに猛る威勢も、忽ち尾を伏せ、耳を垂れ、じり、と四足を縮め、恐れわなき岩洞に匿れ入る、尾筒をつかんで跳返し、打伏せ、ひるむ所を乗懸り、足下にしつかと

風來人

笑壺に入る

ほざく

いかな事

踏まへしは、天の斑駒、素戔嗚尊の神力、天照神の威徳ぞ有難き。
 かゝる所に勢子の者、群がり來るその中に、大將と思しき者大音
 揚げ、「やあ〜うぬはいづくの風來人、我が高名を妨ぐる。その虎は
 忝くも主君右將軍李踏天より、韃靼王へ獻上の爲、狩出したる虎な
 るぞ。早々渡せ。異議に及ば、ぶち殺さん。しやぐわん、〜」とわめき
 けり。李踏天と聞くよりも、願ふところと笑壺に入り、「やあ、餓鬼も人
 數、しをらしい事ほざいたり。身が生國は大日本、風來とは舌長し。さ
 程ほしがる虎ならば、主君と頼む李踏天とやら石花菜とやら、此所
 へ突出し詭言させいぢきに逢うて用もある。さもないうちはいか
 な事ならぬ〜」とねめつくる。「やあ、ものな言はせそ、討取れ」と、一度
 に劍をはらりと抜く。「心得たり」と守を虎の首にかけ、母の側にひつ
 据うれば、繋ぎし如くに働かず、「おゝ心安し」と太刀差しかざし、群が
 る中に割つて入り、八方無盡に割立て〜撫てまくる。

色めき立つ

二王立

勢子の大将安大人、官人引具し立歸り、「おのれ老耄餘さじ」と、一文
 字に切掛る。なほも神明擁護の驗、神力虎に加つて、むつくと起きて
 身慄し、敵に向ひ齒を鳴し、猛りうなりて飛懸る。「こはかなはじ」と安
 大人、勢子の者がさいたる劍、かり鉾、數槍、手に當るを幸ひに、投附け
 投附け打懸くる。虎は神力自在を得、劍を宙にひつくはへ、ひつくは
 へ、岩に打當て微塵になす。刃の光、玉散る霞、氷を碎くに異ならず。打
 物盡くれば、官人ども、色めき立つて迷惑ふ。後より和藤内、「どつこい
 遣らぬ」と顯れ出で、安大人が素首をつかんで差上げ、くる〜と振
 廻し、えいやつと打附くれば、岩に熟柿を打つ如く、五體ひしげて失
 せにけり。この勢に官人ばら、後へ戻れば、惡虎の口、先へ行けば和藤
 内、二王立に突立つたり。「あゝ、申し御堪忍。御免、々々」と手を合せ、土に
 くひつき泣きゐたり。和藤内虎の背を撫で、「うぬらが小國とて侮
 る日本人、虎さへこはがる日本の手並を覺えたか。我こそ音に聞え

せがれ(一) 肥前國長崎縣北松浦郡平戸島にある。

た鄭芝龍老一官がせがれ九州平戸(一)に成長せし和藤内とは我が事なり先帝の妹宮梅檀皇女にめぐり逢ひ三世の恩を報ぜん爲父が故郷に立歸り國の亂れを治むるなり。さあ命惜しくば身方につけ。否と言へば虎の餌食。否か。應か。とつめかくる。なう。なんの否で御座りましよ。韃靼王に従ふも李踏天に従ふも命が惜しさ。向後(二)お前の御家來どもお情頼み奉ると。地に鼻つけて畏まる。

「お、出かした、く。さりながら我が家來になるからは日本流に月代剃つて元服させ名も改めて召使はんと。指添のちひさがたなはづし。これも當座の早剃刀。母も手々に受取つて。並ぶ頭の鉢の水。揉むや揉まずに無理無體。片端そるやらこぼつやら。絲鬢。厚鬢。剃刀次第。瞬く間に剃りじまひ。二櫛半のはらけ髪。頭は日本。ひげは韃靼。身は唐人。互に顔を見合せて。頭ひやつく風引いて。くつさめ。く。むら雨と。涙を流すぞ道理なる。親子どつとうち笑ひ。そろひもそろう

出かした

はらけ髪



國姓爺正本挿畫

た供廻り名も日本に改めて。何左衛門。何兵衛。太郎。次郎。十郎まで。面々が國どころ頭字に名のり。二行に立つて。ぼつたてろ。承り候と。御先手の手振の衆。ちやぐちう左衛門。東蒲塞右衛門。呂宋兵衛。東京兵衛。暹羅太郎。白城次郎。ちやるなん四郎。ほるなん五郎。うんすん六郎。すん吉九郎。もうる左衛門。じゃが太郎兵衛。さんとめ八郎。英吉利兵衛。今參の御供先。あとに引馬。虎斑の駒。母を助けて。孝行の名を取る。口取る。國を取る。譽は異國本朝に。踏跨げたる鞍あぶみ。虎の背中にうち乗つて。威勢を千里に顯

「八千里が竹

せり。

— 國姓爺合戦 —

自修文

教化上より見た近松

藤村 作

(國文學者、文學博士、東京帝國大學名譽教授、明治三十五年(一八八五年)福岡縣に生れた。時代淨瑠璃、偉人等の英雄に取つた淨瑠璃に對する職責、職務上の責任。

識者見識をもつた者は、問はれなかつた。答められなかつた。

教化の目から見れば、巢林子の時代淨瑠璃は、悉く武家精神の通俗宣傳たるものである。元祿時代は主従の上下關係と、軍人たる職責の性質とを基礎として成立した武士精神と、個人の福利を營むを本務とした町人精神とが階級的に對立して、未だその相互の浸潤感化を著しくしなかつた時代である。武士も武士らしい武士であれば、町人も町人らしい町人であつた時代である。その後、兩階級の間、兩精神の浸潤感化が次第に行はれて來たのである。武士の町人化は、武士本位の時代であつたから、武士の墮落として、政治當局者や識者の憂となつたのであるが、町人の武士化は、それが階級制を壞すやうな事でない限り、多く問はれなかつた。のみならず、實際町人の徳操品位を高めたものは、そ

尤なる者、優れた者、源頭、みなもと。



近松門左衛門(坂内青嵐筆)

の感化であつたのである。この武士精神を町人間に宣傳して、町人の武士化を促した上に、近世のいはゆる通俗文藝の功の多い事は、固より言ふまでもあるまい。巢林子の如き、この方面に於ても、蓋しその尤なる者である。彼は新淨瑠璃の源頭に立つ人で、彼によつて淨瑠璃文學は大成されて、爾後の作者は、一人として彼の直接間接の感化を受けてゐない者はない。極端に言へば、他は悉く模倣追随者である。かうして彼によつて大成された新淨瑠璃時代物の内容は、殆ど彼以來固定した有様であるが、その中心たるものは、武士道精神に外ならぬ。時代の選

び方は、王朝時代であらうと、武家時代であらうと、また場所が我が國であらうと、外國であらうと、説話の根幹となつてゐる精神は、常に近世武士道精神である。

この精神を表現するに、彼は彼のいはゆる「慰み」を目的とした民衆的な藝術の衣裳を以てした。公卿であらうと、武士であらうと、町人的な性質の一部をもたしめる事を必ず試みてゐる。彼の爲した時代錯誤や、階級混同は、彼の無智無學から起つたのではなくして、彼の藝術上に意識した目的から來た事である。彼はこれくらゐな事を知るだけの歴史上の知識はもつてゐたに相違ないが、無智な民衆の娛樂を目的とした爲に、これを犯す事を辭しなかつたのであらう。この事を教化上から考へてみれば、寧ろ彼の藝術の強みである。

彼の藝術意識が、馬琴などの如き儒教風の功利的教訓主義のそれでなかつた爲に、彼の藝術は馬琴物の如き淺膚露骨な教訓

時代錯誤
時期や時代を
誤ること。時
代上の矛盾。
藝術意識
詩歌、音楽や、
演劇などの藝術
對する心の感
覺作用。
功利主義
十八世紀十九
世紀にわたつ
てイギリスの
ベンサムやミ
ルの唱へた倫
理説で、自分
の最大多數の
人が行ふ結果
となる最大の
善と定める
主義。

物に墮せずに濟んだ。そして教訓物に墮さなかつたところが、教化上一層有効であつたに相違ない。眞の感化は期待しない所に多くある。文藝も教訓物よりは、却つて教訓物でないものに多くの教化が期待される事が多い。武士道精神を主要内容として、通俗的で受容れ易く、美しい麗しい色と甘い味とを附けられた娛樂的な藝術の形で創作され、作毎に一代の人心を沸かしたためであるから、その社會教化上の効果の少くなかつた事は、想像するに難くないのである。唯政治家の事業の如く、若しくは學者の著述の如く、その効果を計る尺度のない爲に世人に看過され易いが、若し此所にこれ等を平等に計量し得べき方法があるならば、彼の直接間接の社會教化上に於ける業績の、いかに偉大なものであつたか、明瞭に知り得られるであらう。

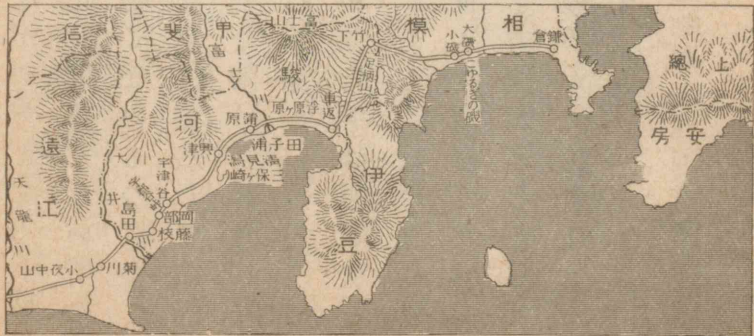
—上方文學と江戸文學—

(一)藤原氏の後醍醐天皇の御勤王の御討幕に密に動いた。中を變つた。送られた。捕らる。難を免れた。捕らる。弘に送られた。元九二年に斬られた。

(二)「またや見ん櫻狩の雪」
古今集 藤原俊成
(三)「朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき」
拾遺集 藤原公任

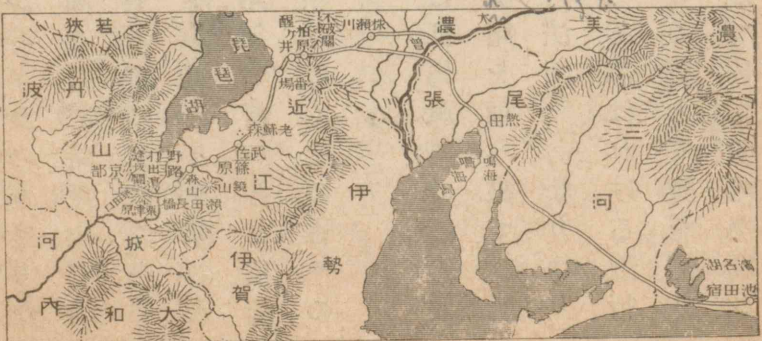
一九 落花の雪

俊基朝臣は七月十一日にまた六波羅に召捕へられて、關東へ送られ給ふ。再犯赦さざるは法令の定むるところなれば、何と陳ずるとも赦されじ。路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと思ひまうけてぞ出でられける。
落花の雪に踏迷ふ、交野の春の櫻狩紅葉の錦を著て歸る。嵐の山の秋の暮ひと夜をあかす程だにも、旅寝となればもの憂きに、恩愛の契淺からぬ、我がふるさとの妻子をば、行方も知らず思ひ置き、年久しくも住みなれし、九重



(一)大津市の石場附近の琵琶湖畔の地
(二)「貢物たえずの勢多の長橋のおともといろ平兼盛」
(三)「近江より朝ねの野に川鳴ぞなくなる明けぬこの夜は」
古今集 大歌所
(四)「白露も時雨は下葉のく守山は色づきにけり」
古今集 紀貫之
(五)滋賀縣蒲生郡安土村の東南
(六)共 同縣 阪田郡

の帝都をば、今を限りと願て、思はぬ旅に出て給ふ、心のうちぞ哀れなる。
憂きをば止めぬ逢坂の關の清水に袖ぬれて、末は山路を打出の濱沖を遙かに見わたせば、潮ならぬ海に焦れ行く、身をうき舟の浮き沈み、駒もとゞろと踏鳴す、勢多の長橋うち渡り、行交ふ人にあふみ路や、世をうねの野に鳴く鶴も、子を思ふかと哀れなり、時雨もいたく守山の木の下露に袖ぬれて、風に露ちる篠原や、篠わくる路を過行けば、鏡の山はありとて、も、涙に曇りて見えわかず、物を思へば夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒を止めて、顧る、ふるさとを雲や隔つらん、番場醒井、柏原、不破の關



(一)「うぢわたす今か汐干となるみ海とよはる船の聲も通はず」大木集常磐井入道
 (二)愛知縣尾張國西方面にあつた江灣の稱。今寺、星崎の南
 (三)靜岡縣遠江國天龍川の東岸にある。古へは西岸にあつた。
 (四)第八十一代安徳天皇の壽永三年に當る。(一八四四年)
 (五)靜岡縣遠江國榛原郡金谷と日坂との間の坂嶺。
 (六)一年たけてま
 (七)たこゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山(新古今集西行法師)ながえ(轅)亭午

屋は荒果てゝなほもるものは秋の雨のいつか我が身のをはりなる、熱田の八つるぎ伏拜み汐干に今や鳴海瀉傾く月に路見えて明けぬ暮れぬと行く路の末はいづくと遠江濱名の橋の夕汐に、ひく人もなき捨小舟沈み果てぬる身にしあれば誰か哀れと夕暮の、入相鳴れば今はとて池田の宿に著き給ふ元暦元年の頃かとよ、重衡の中將の、東夷の爲に捕はれて、この宿に著き給ひにし、その古への哀れまでも、思ひ残さぬ涙なり。

旅館の燈かすかにして、雞鳴曉をもよほせば、匹馬風にいばえて、天龍川をうち渡り、小夜の中山越えゆけば、白雲路を埋み來て、其所とも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が「命なりけり」と詠じつゝ、ふたゝび越えし跡までも、羨ましくぞ思はれける。隙行く駒の足早み、日既に亭午にのぼれば、餉參らす程とて、輿を庭前にかき止む。ながえをたゝいて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ

(一)榛原郡。
 (二)第八十五代仲恭天皇の承久三年(一八八八年)

(三)今京都市右京區嵯峨にある天龍寺。
 (四)靜岡縣(駿河國)志太郡。龍頭鷓首
 (五)歸りくるほどはなけれど、朝露の岡べの眞葛うら枯れにけり(藤原爲家)

給ふに「菊川と申すなり」と答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし咎によつて、光親卿關東へ召下されしが、この宿にて殺されし時、

昔、南陽縣、菊水。 汲下流、而延齡。
 今、東海道、菊川。 宿西岸、而終命。

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、哀れやいとどまさりけん、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。
 いにしへもかゝるためしをきく川の

おなじながれに身をやしづめん

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花盛、龍頭鷓首の船に乗り、詩歌管絃の宴に侍りし事も、今は再び見ぬ夜の夢となりぬと、思ひつゞけ給ふ。鳥田、藤枝にかゝりて、岡べの眞葛うら枯れて、もの悲しき夕暮に、宇都の山べを越えゆけ

(一)駒とめて過ぎざやられぬ
 (二)清見渇波の關
 (三)橋顯昭
 (四)河國)庵原郡(駿
 (五)富士の嶺の
 (六)煙はなほぞ立
 (七)ちのぼる上な
 (八)きものはおも
 (九)ひなりけり
 (十)新古今集、藤
 (十一)原家隆
 (十二)同縣駿東郡足
 (十三)柄村の地
 (十四)いそゆるぎの
 (十五)磯菜つむら
 (十六)ざしぬらすな
 (十七)沖にをれ波
 (十八)古今集、相模
 (十九)第九十六代後
 (二十)醍醐天皇(一九
 (二十一)弘元年)一九
 (二十二)九一年)
 (二十三)江戸時代の眞
 (二十四)淵學者、賀茂の國
 (二十五)歌、學、賀茂、和
 (二十六)藤、文、加、藤、千、七
 (二十七)年、八、二、年、四、六
 (二十八)一、六、七、七、六、六

ば、つた、楓いど茂りて路もなし。昔業平の中將の、すみかを求むとて、
 東の方に下るとて、夢にも人にあはぬなりけり」と詠みたりしも、か
 くやと思ひ知られたり。清見渇を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ通
 さぬ波の關守に、いと涙をもよほされ、向ひはいづこ三保、崎興津、
 蒲原(三)うち過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき
 思にくらべつゝ、明くる霞に松見えて、浮島原を過ぎゆけば、汐干や
 浅き舟浮きて、おりたつ田子のみづからも、うき世をめぐる車がへ
 し、竹の下路行惱む、足柄山の峙より、大磯、小磯見おろして、袖にも波
 はこゆるぎの、いそぐとしもはなけれども、日數積れば七月二十六
 日の暮程に、鎌倉にこそ著き給ひけれ。
 — 太平記 —

二〇 芳宜園大人の靈を祭る

村田 春海

こゝに文化の五とせ九月八日平春海謹みて芳宜園の大人のお

うなねつく

このかみ

子のよ、
 兄のさき

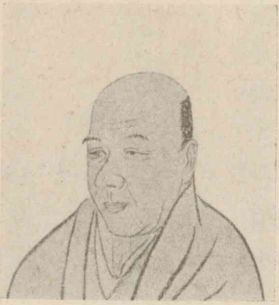
はかし

おとゝえ

世のさが

菴

くつきの御前に菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらをたきて、う
 なねつきて申さく。あはれ悲しきかも、君は吾に十と言ひて一とせ
 のこのかみにおはするなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君はま
 さにさかりの齡におはして、吾はまだわらはにてぞ侍りける。常に



村田春海

縣居の庭にも、の學びに行きかひたる時、あし
 たに參るとしては、君のみはかしのしりへに従
 ひ、ゆふべにまかるとしては、君の御袖のもとに
 すがりて、相うるはしみまつれること、親子は
 らからにも何か異ならん。書讀むとては、君を
 師ともたふとみ、歌作るとしては、吾をおとゝえのつらにぞ教へ給ひ
 ける。中ごろにして君は仕の途に暇なくおはし、吾は世のさがにか
 かづらひて、おのづから疎き方にも過ぎつるを、君仕をしぞき給ひ
 て後は、吾も同じ巷に移り住めば、花を尋ぬとては、吾道しるべをな

二〇 芳宜園大人の靈を祭る

一一七

ありふる

閑居燈
世の事はそ
むきはてた
る窓のうち
になどいも
し火の花を
みすらん
春海

(一)宋人有耕田者。田中有株。兔走觸株。折頸而死。因釋其耒而守株。冀復得兔。兔不可復得。而自爲宋國笑。(韓非子)

し、月を思ふとては君が舟に相乗り、憂き事もともに憂へ、嬉しき節もともに喜びて、世にありふる業の、まめごともあるごとく、かたみに隔なく心をかはせること、今にはたとせ。その初を繰返し數ふれば、相友たることすてに五十とせにぞ餘りける。さるを今おくれ奉りて、いつの世にか相見ん、何れの時にかこととはん。常なきは人の

不名

その事もしも、さるの定めし
かたし、さるの定めし

蹟筆海春田村

身の習ぞと知れど、これをいかてか歎かざらん。かゝるを誰かはよく堪へん。

あはれ悲しきかも。文の林世々に衰へ、言の葉の道日々下り行けるを、賀茂の翁世に出て、今を捨て、古へに復り、青雲の高き心しらひを求め、賤機のおやあるみやびごとを尊み言へれど、くひぜ

(一)楚有涉江者。其劍自匣中墜于水。遽刻其舟。曰、是吾劍所從墜也。舟止。入水求之。船已行矣。而劍不行。求劍若此。不亦惑乎。(呂氏春秋)

者。其劍自匣中墜于水。遽刻其舟。曰、是吾劍所從墜也。舟止。入水求之。船已行矣。而劍不行。求劍若此。不亦惑乎。(呂氏春秋)

橘諸兄
菊成王
大伴家持

評優う起越丸
價なき寶
面おこし

を守り、舟にきだつくともがら、かれに泥み、こゝにひかれて、なほ怪しみとがむるたぐひは多く、たまあひてよくうけひく人なん稀なりしを、君ひとり心を起して、普く諭し、廣く誘ひしより、近き人はまのあたり相うづなひ、遠き人は遙かに靡き來て、いにしへぶりの歌、世にさかりになりたるなり。その自ら詠みいで給へる歌を見るに、古き調、新しき姿、とりとに備らざるはなし。その古へを寫せるは、藤原寧樂の御世に及び、後の巧に倣へるは、堀河、鳥羽の御時に下らざ。心に思ふことは口に盡さることなく、目に觸るゝものは言の葉にのせざることなんあらざりける。これを見て、たかきもみじかきも、めでたふとまざる人なし。また事好みの人は、その名を君に知られては、身の面おこしと思ひて世にも誇り、君のひと歌を得ては、價なき寶にもかへじと言ひてぞ深く喜びける。然るを今黄金の聲忽ち止みて、玉の響ふたゝび聞えずなりぬるは、わがどちの歎

二〇 芳宜園大人の靈を祭る

一三九

此の「意味を」究了の意を失つて
一三〇 句の調をいふ

のみかは、おほかたの世の憂とも言ひつ可能し。これをいかでか惜しまざらん。かゝるを誰かは慕はざらん。あはれ悲しきかも。我がかく言舉するを、泉の下にも、さやかはつきりとわつわつにきこしめし、天翔りても遙かに見そなはせとなん申す。
— 琴後集 —

二一 國文學の精神

久松 潜一

國文學の精神とは何であるか。從來動もすれば、それは單に優美な、いはゆる月花を玩ぶ事に過ぎないかのやうに解せられて居る。國文學の全般を通じて見るに、かくの如き方面の存して居る事は勿論否定出來ないが、それよりもつと廣い、もつと生活的意味のある他の方面の存する事も、また見逃す事が出來ない。私は國文學を流れる最も著しい精神として、「まこと」と「ものあはれ」と「幽玄」との三つを挙げたい。私にはこの三つが主要な國文學の精神であり、

久松 潜一

(一)國文學者、文學博士、東京帝國大學教授、明治二十七年(一九〇四年)愛知縣に生れた。

神人同格的な自然神
英雄神格
祖先神格
神格的な人

その本質であるとさへ言ふ事が出來るやうに思はれる。

第一に「まこと」とは、あるがまゝのものを、あるがまゝに表現する精神である。これは何よりも上古文學を貫く精神であつて、これを内容的、思想的方面から見ると、其所に強い國家的な精神と、個人的な精神とが現れて居る。

國家的精神は古事記を中心として見られるところであつて、國家も宇宙も人類も神によつて作られたといふ如く、すべて神を中心として見る精神である。神には精靈說的な精靈もあれば、神人同格的な自然神もあり、英雄神格な人格神もあれば、祖先神格な人格神もあるが、何れにしても、それは自己より偉大なものであつて、その神によつて生きるのが古代人の眞實な精神であり、それがそのまま、表現されたのが古事記である。

一方、個人的精神は萬葉集を中心として現れて居る。もとより萬

(一)第四十代天武
天皇の御子高
市皇子

葉集にも國家的な意識も見えるけれども、その中心をなすものは個人的精神である。人麿が皇子の薨去を悼み奉つた歌にしても、國家の建設を説き、神を歌つては居るが、その中心はやはり皇子の薨去を悼み奉る彼自身の哀痛の感情にある。即ち國家的觀念を背景として、個人的な抒情的精神を現して居るのである。かくて個人的精神から出發して居る萬葉集の感情や觀念は、一方には自然に對してひたすらな愛を向け、自然のうちに身を投入れて、其所に自然と一つになつた境地を示して居るが、一方にはまた人生に對して情熱的な愛を歌ひ、現實をよりよく生きて行かうとする精神も見えるのである。

この素樸な「まこと」の感情を中心とする上代人の物の見方は、第一に一元的、綜合的であつて、彼等は自己のうちに神を顯現せしめ、自然のうちに自己を見出して居る。第二には率直で積極的である。

單純で、餘曲折がない。遠慮もなければ、はにかみもなく、思ふまゝ、欲するまゝに進んで行く。第三に具象的である。歌を詠むにも、目に觸れた事象を先づ歌ふ。對象があるがまゝに直觀し、それを直接的に表現する。

而してこの精神は、この後に於ても國民生活の基調をなすものであつて、いつの時代にも文學が爛熟期、廢頽期に陥ると、常に復古的精神として現れ來つて居る。

人間が現實生活のはかなさ、醜さに悩む時、ひたすら素樸性と眞實性を求めるのは、即ち童心に歸る事に外ならない。それは文化の展開、文學の發達に於ける究極ではなくて、嚴肅な第一歩である。この「まこと」の精神が、常に力強い、雄々しいますますをぶりの精神となつて、國文學の流の中に持續的に流れて居るのである。

第二に「ものあはれ」とは「もの」の中に見出された「あはれ」の精神

である。あるがまゝのものの上に見出された、あるべき世界である。それはまた心と形との調和の中に見出される情趣の世界であるとも言へよう。本居宣長は「ものあはれ」を源氏物語の基調であり、平安時代文學の根本であるとして居る。それは上古文學の中に見出される素樸な感情ではなく、それを飽くまで洗煉した境地である。「あはれ」は、發生的に言へば、悲哀ではなく、悲しみの場合にも、喜の場合にも、共通な「あゝ」といふ感動である。高天原の岩戸の前の神樂に「あはれ、あなおもしろ、あなたのだし」とある。「あはれ」はそれである。随つてそれは春の朝のほがらかな感情にも、秋の夕べの寂しさの感情にも見出される精神であるが、何れかと言へば、しんみりとした情趣を主とし、其所から悲哀の情趣ともなるのである。この精神が平安時代の文學のすべての上に見出される。

今「ものゝあはれ」の意識の展開を見るに、最初は限定されない「も

の」の上に、自由に「あはれ」を創造したのに對して、次第に「あはれ」が固定し觀念化されて、その固定し觀念化された「あはれ」を以て「もの」を見るやうになつた結果、「もの」が次第に限定されるやうになつた。かくて「あはれ」と「もの」が著しく限定され特殊化されたものとなり、それだけ自由な生き／＼とした「もの」と「あはれ」とが失はれて來たやうである。

この「ものゝあはれ」の精神は、中古文學のみでなく、中世文學の上にも流れて居る。平家物語は敘事詩的な物語であるが、それを貫いて流れるものは、やはりこの精神である。否、寧ろ軍記物語には、英雄的、敘事的な精神と「ものゝあはれ」を主潮とする抒情的な精神とが互にもつれ合つて、其所に花やかな、勇壯な悲壯美を形づくつて居るといふ方が至當であらう。

この境地は、更に近世に至つて大きな流となつて現れて居る。先

づ近世の擬古文脈を始めとして、宣長の物語論、和歌に於ける新古今主義など、何れもこの精神を中心とするものである。かう見て來ると、もののははれの精神は、中古文學以來絶えず國文學の中に流れて居た主要な精神の一つであると言ふ事が出來よう。

第三に「幽玄」の精神に就いて考へてみたい。古今集の眞名序に「或事關神異、或興入幽玄」とあつて、その本來の意味は「もののははれ」とほゞ同様で、形象として表される纖細な情趣をさして居る。言外の景氣や餘情を重んずるところに、象徴的な性質を有する。「幽玄」の精神を殊に重んじた俊成の「幽玄」も、能樂の「幽玄」も、この點に共通する。しかもその時代の宗教的な考、殊に平安末期に於ける轉變窮りなき現實のはかなさは、特に無常觀を深め、爲に「幽玄」の境地も物寂しさを主とするやうになつた。俊成が彼の最も得意な歌として「夕されば野邊の秋かぜ身にしみてうづら鳴くなり深草の里」を擧げた

と傳へられる點から見ても、「幽玄」の中心をなすものは、秋の夕暮の寂しさのやうな境地であつた事が知られる。西行が自然のうち放浪する事によつて見出して來たものもそれである。美しく咲く櫻の花蔭に潛む静けさ、寂しさを見出たのが西行であつた。而してこの「幽玄」は、俊成のよくいふ、とほじろい、即ち壯大といふ感情と、心が細かい、即ち纖細といふ情趣とを統一したところに見出される精神である。

更に一步を進めて表現の點から考へるに、この精神は、あるがままの心持を、あるがまゝに現さうとするよりは、あるがまゝのもの、あらうとするものをば、一の型に入れて表現しようとするものであつて、中世の人々が個人を否定して「家」に生き、個性を否定して普遍性に生きようとした精神と一致するものがある。大きい自由な精神を、型といふ窮屈な狭いものゝ中に入れて、それを凝縮せしめ

結晶せしめて、其所から、水晶のやうな透明なものを作り出さうとする。其所に小さい我が否定されて、大きな自我が現れて来る。これが「幽玄」に外ならぬ。茶道に於て、小さい茶室の中に自由な境地を見出し、庭園藝術に於て、一本の樹、一箇の石によつて深山を象徴し、文人畫に於て、一本の線によつて限りない餘情を暗示し、潑刺たる氣韻を生動せしめて居るのもこれに外ならぬ。

その他、室町藝術の代表とも言ふべき能樂が、一つの型の中に、いかに複雑な人間性を生かし得て居るか。この精神は更に宗教的、神祕的精神とも結び付き、表面に現れない美しさ、小さいものの中に含まれた限りない大きさを成立させた。それが「幽玄」の精神である。而してこの「幽玄」は、近世に於ては芭蕉の閑寂となり、あるがまゝの自然の奥深く入る事によつて、其所に彼のいはゆる「さび」を見出して居る點に於て、「まこと」の精神から更に深く入つて居ると言へ

さび

よう。高く心をさとりて俗にかへるべし」といふのは、生活を「さび」化し、「幽玄」化する事であると解せられる。かくの如くして、自然と人生との究極である「さび」や「幽玄」は、また藝術の究極でもあつたのである。「句」や「細み」や「しをり」を重んじた彼の俳諧は、實に「さび」の藝術であり、「幽玄」の藝術であつた。かくて自然と人生と藝術とを貫いて流れる「さび」即ち「幽玄」が、芭蕉の精神であると言へよう。

これを要するに、「まこと」は、あるがまゝのものに理念を見出した境地であり、もののははれは、あるがまゝのものの中からあらうとするものを見出した境地であり、更に自然と人生と藝術とを結び付けて、それにいぶしをかけて、統一せしめ結晶せしめた白光の如き境地が「幽玄」であると言へよう。

かう見て來ると、「まこと」と「もののははれ」と「幽玄」とは、一見異なつた理念のやうであるが、しかし、それは本質的な相違ではなく、一つ

の日本的なものの展開に於けるそれ／＼の過程に外ならぬ。まこと「童心と素樸との藝術を生み」もの「あはれ」が心と形との調和融合した藝術を成し、「幽玄」が自然や人生を型の中に入れて、更に結晶した白光として表さうとする象徴的な藝術を生出して居る。而してこの展開しつゝある精神を明らかにする所に、國文學の本質が見出されはしないだらうか。

—上代日本文學の研究—

帝國讀本 改制新版 卷九 終

附 錄

一 敬讓語(口語)

一 敬讓の意を含む文語動詞

一 國語假名遣一覽

敬讓語(口語)

一名詞

- (甲) お年 お顔 お宅 お歸り お休み おいくつ
おいくたり お一つ お十一 御返事 御挨拶
御機嫌 御本
- (乙) 神さま 井上さん 太郎君
- (丙) お母さま お弟さん 御尊父さま

二人代名詞

自稱	對稱	他稱	不定稱
わたくし	あなたさま	この(お)かた	どの(お)かた
わたし	あなた	その(お)かた	どなたさま
		あの(お)かた	どなた

三動詞

- (甲) 本來の敬讓語 (○印は連語を示した)
あがる・召しあがる(食フ、飲ム)

あそばす・なさる(爲ル)

いらっしゃる(來ル、行ク、居ル)

おしやる(言フ)

おぼしめす(思フ、考ヘル)

くださる(與ヘル)

見える(來ル、居ル)

めす(呼ブ、着ル、穿ク、乗ル、買フ)

〔以上、尊敬の意を含むもの〕

○お出でになる、お出でなさる(來ル、行ク、居ル)

あがる、參上する(訪ネル、行ク)

あげる、さしあげる(與ヘル)

いたす、つかまつる(爲ル)

いただく、頂戴する(貰フ、食フ、飲ム)

うかがふ(聞ク、訪ネル)

ございます(居ル、有ル)

存ずる、存じ上げる(知ル)

たべる(食フ)

申す、申上げる(言フ)

まゐる(行ク、來ル)

拜見する(見ル)

拜借する(借リル)

拜讀する(讀ム)

拜聽する(聞ク)

○お目にかかる(面會スル)

お目にかける、

御覽に入れる(見セル) (以上、へり下る意、)

(乙) 敬讓動詞のつくり方 「○印は連語を示した」

お歌ひ
遊ばす
なさる
下さる
に、なる

御苦勞
遊ばす
なさる
下さる
に、なる

○見て下さる、讀んで下さる (以上、尊敬の意を含むもの)

お届
申す
申上げる
致す

お供
申す
申上げる
致す

○お届ける、お供する (以上、へり下る意のもの)

(丙) 尊敬の意の添へ方 (助動詞「れる」を付ける)

父は英書も讀まれる。

今日は佐藤君も來られる

(丁) 丁寧の意の添へ方 (助動詞「ます」を付ける)

先生も仰つしやいます。

私からも申上げます。

先生もお歌ひになります。

私もお供致します。

紙が飛びます。

四 形容詞

(甲) 「お」を付ける。

こんなにお暑いのに……………。

お恥しい次第ですが……………。

(乙) 「です」「でございます」を付ける。

これは古(いにしへ)の(は)です。

これは新(あらた)しう(は)でございます。

それはお高(たか)し(は)です。

それはお珍(めづ)しう(は)でございます。

五 形容動詞 「お」「ご」を付ける

それはお珍(めづ)しからう。

若(わか)しお寒(ひや)かつたら……………。

あそこはお静(しず)かです。

あそこはお静(しず)かでしたか。

そんなにご丈夫(丈夫)なら、もう安心(あんしん)ですね。

ご丁寧(ていねい)な御挨拶(ごあいさつ)で痛み(いたみ)入ります。

敬讓語(口語)

六 副詞

おまめにお働(はたら)きなさいませぬ。

ごゆつくりなさいまし。

ここはお静(しず)かではございませぬ。

七 「で、ある」「だ」の意

助動詞「です」、連語「でございます」などを

用ひる。

あれは學校(がっこう)です。

あれは學校(がっこう)で ございます。

あのかたは先生(せんせい)で いらつしやいます。

大將(だいしょう)はその時(とき)、少將(しょうしょう)で お出(いで)でになつた。

敬讓の意を含む文語動詞

(甲) 尊敬の意を含む語

- あそばす (爲ル)
- います、ます、まします (アル、居ル、行ク、來ル)
- おはす、おはします (同前)
- おほす (言フ、言ヒツケル)
- おぼす、おぼしめす (思フ)
- きこしめす (聞ク、飲ム、食フ)
- しろしめす (知ル、統べ治メル)
- たてまつる (著ル、乗ル)
- たまふ、たぶ (與ヘル)
- のたまふ (言フ)

(乙)

- まゐる (飲ム、食フ、著ル)
- みそなはず (見ル)
- めす (飲ム、食フ、著ル、乗ル)
- わたる (アル、居ル)
- へり下る意、丁寧の意を含むもの
- いたす、つかまつる (爲ル)
- うけたまはる (聞ク、承諾スル)
- さふらふ (アル、居ル)
- きこゆ、まうす (言フ)
- たてまつる、まゐらす (與ヘル)
- たまはる (貰フ、受ケル)
- はべり (アル、居ル)
- まかる (退ク、歸ル、行ク)
- まゐる (行ク)

國語假名遣一覽

わ (は)	わ (輪)	わ (腸)	よわし (弱し)	わ (井手)	わ (居)
くちわ (口輪)	はらわた (腸)	よわく (乾く)	かたく (堅く)	わ (井戸)	わな (井中)
おほわ (大輪)	このわた (海鼠腸)	さわぐ (騒ぐ)	さわやか (爽か)	わ (井)	わな (井守)
おもわ (面輪)	こわ (聲)	すわる (坐る)	さわやか (爽か)	わ (井)	わな (蟻)
はにわ (埴輪)	こわい (聲色)	あわたし (惶し)	さわやか (爽か)	わ (井)	わな (蟻)
わ (廊)	こわね (聲音)	たわいなし	さわやか (爽か)	わ (井)	わな (蟻)
くるわ (廊)	こわづかひ (聲遣)	語の中や下に來る「わ」は右に	さわやか (爽か)	わ (井)	わな (蟻)
わ (曲)	こわづくろひ (聲づくろひ)	舉げた他は「は」を用ひる。例	さわやか (爽か)	わ (井)	わな (蟻)
うらわ (浦曲)	こわだか (聲高)	川 澤 粟 瓦 雞 庭	さわやか (爽か)	わ (井)	わな (蟻)
いそわ (磯曲)	わざ (業)	桑 諷 安房 永久 繩	さわやか (爽か)	わ (井)	わな (蟻)
あわ (沫)	しわざ (仕業)	障 廻る 變る かはいら	さわやか (爽か)	わ (井)	わな (蟻)
あわもり (泡盛)	わり (割)	し等	さわやか (爽か)	わ (井)	わな (蟻)
みなわ (水沫)	ことわり (事割)	し等	さわやか (爽か)	わ (井)	わな (蟻)
わけ (分)	いわけ (言分)	わ (井)	さわやか (爽か)	わ (井)	わな (蟻)
いひわけ (言分)	ことわけ (辭分)	わ (井)	さわやか (爽か)	わ (井)	わな (蟻)
ことわけ (辭分)	おひわけ (追分)	わ (井)	さわやか (爽か)	わ (井)	わな (蟻)
おひわけ (追分)	のわけ (野分)	わ (井)	さわやか (爽か)	わ (井)	わな (蟻)
のわけ (野分)	わけがら (譯柄)	わ (井)	さわやか (爽か)	わ (井)	わな (蟻)
わけがら (譯柄)	ひきわけ (引分)	わ (井)	さわやか (爽か)	わ (井)	わな (蟻)
ひきわけ (引分)	わた (綿)	わ (井)	さわやか (爽か)	わ (井)	わな (蟻)

あゐ (藍) くれのあゐ (呉の藍) 紅
なゐ (地震) うなゐ (髻髪)
かたゐ (乞食) あぢさゐ (紫陽花)
あぢさゐ (紫陽花) あり (禮)
 「あ」の假名をつかふ語は右に掲げたもので、その他、上に来る「い」の音は「い」を用ひる。例へば
 今 糸 石 岩 池 犬
 急ぐ 怒る 頂く 往ぬる
 訝る いたはる等

い音便
 さいたま (埼玉)
 さいはい (幸)
 きさい (后)
 ついたち (月立) 朔
 ついたて (衝立)
 やいば (焼双) 刃
 かい (搔) 權
 かうがい (髪搔) 筭
 たいまつ (燒松) 松明
 ついち (築地)
 かいしろ (垣代)
 かいぞ (介添)

う音便
 あまうど (商人)
 いもいと (妹人) 妹
 おとうと (乙人) 弟
 なかうど (仲人) 媒酌
 くろうと (黒人) 玄人
 しろうと (白人) 素人
 かうし (格子)
 かうべ (神戸)
 こうち (小路)
 てうす (手水)
 かうぶ (冠)
 たうげ (手向) 峠

加音
 しいか (詩歌)
 しいじ (四時)
 むいか (六日)
 語の中や下に来る「い」は右のものだけで、その他は「ひ」を用ひる。例へば
 鯛 貝 鯉 筈 蠶 鷺
 舞 謡 假令 小し 問ひ
 疑ひ 買ひ 思ひ等

う音便
 あまうど (商人)
 いもいと (妹人) 妹
 おとうと (乙人) 弟
 なかうど (仲人) 媒酌
 くろうと (黒人) 玄人
 しろうと (白人) 素人
 かうし (格子)
 かうべ (神戸)
 こうち (小路)
 てうす (手水)
 かうぶ (冠)
 たうげ (手向) 峠

加音
 ひうが (日向)
 こうや (紺屋)
 はうき (簪)
 かうち (河内)
 ひやうし (拍子)
 まうで (詣で)
 たかう (高)
 ならうて (習うて)
 おもうて (思うて)
 とうて (問うて)
 かたじけなうす (辱うす)
 まうす (申す)

加音
 やうか (八日)
 まうく (設く)
 やうやう (稍) 漸
 にようばう (女房)
 ふうふ (夫婦)
 語の中や下に来る「う」は右の様な場合で、この他は「ふ」を用ひる。例へば
 食ふ 言ふ 思ふ 購ふ
 補ふ 償ふ 仰ぐ等

ゑ (繪) ゑま (繪馬)
 ゑのぐ (繪の具)
 ゑがく (畫く) 描く
 ゑどる (彩る)

え (元) 補ふ 償ふ 仰ぐ等

ともゑ (巴)
 ゑる (彫る)
 ゑぐる (剝る)
 ゑむ (笑む)
 ゑがほ (笑顔)
 ゑくぼ (嚳)
 ゑつぼ (笑壺)
 ゑむ (咲む)

ゑ (餌) ゑさ (餌)
 ゑぶくろ (餌袋)
 ゑばこ (餌箱)
 ゑぼろし (烏帽子)
 ゑんじゆ (槐)
 ゑんじゆ (槐)
 つゑ (杖)
 つくゑ (机) 几
 ゆゑ (故)
 ゆゑん (所以)
 すゑ (握) 握
 すゑん (握膳)
 すゑふろ (握風呂)
 いしすゑ (礎)
 すゑひろ (末廣)
 こづゑ (梢)
 うゑ (餓)
 うゑしに (餓死)
 うゑ (植) 植木

うゑ (植込) 植込
 えぐし (蕨) 上中下に来る「え」は右の場合だけでこの他、上に来る「え」の音は「え」を用ひる。例へば
 蝦 枝 箴 榎 蝦夷 夷
 選ぶ 襟 似而非 得物等

え (兄) きのえ (木の兄) 甲
 ひのえ (火の兄) 丙
 つちのえ (土の兄) 戊
 かのえ (金の兄) 庚
 みづのえ (水の兄) 壬

え (枝) しづえ (下枝)
 すはえ (條) 江
 え (江) 江
 えりえ (入江)
 ふえ (笛)
 ねえ (鶴)
 はえ (鮑)
 ひえ (稗)
 さゞえ (蠨蛸)
 ながえ (轆)
 え (柄)
 こえ (肥)
 やまこえ (山越)
 みえ (見え)
 はえ (生え)

い (癒え) あまえる (甘える)
 おびえる (脅える)
 おぼえる (覚える)
 たえる (牙える)
 ふえる (殖える)
 中下に来る「え」は右の場合でこの他は「へ」を用ひる。例へば
 家 苗 膚 風 蛙 歸る
 癖 喘ぐ 敢へて 剩へ
 堪へる 悶へる等

え (おほふ) ぞとこ (男)
 ぞのこ (男)
 ぞと (夫)
 ますら (丈夫)
 みやび (風流男)
 さつ (獵夫)
 ぞ (甥)
 ぞ (雄々し)
 ぞす (牡)
 さましか (小牡鹿)
 め (夫婦)
 ぞ (緒)

ぞ (緒) ぞとこ (男)
 ぞのこ (男)
 ぞと (夫)
 ますら (丈夫)
 みやび (風流男)
 さつ (獵夫)
 ぞ (甥)
 ぞ (雄々し)
 ぞす (牡)
 さましか (小牡鹿)
 め (夫婦)
 ぞ (緒)

ぞ (緒) ぞとこ (男)
 ぞのこ (男)
 ぞと (夫)
 ますら (丈夫)
 みやび (風流男)
 さつ (獵夫)
 ぞ (甥)
 ぞ (雄々し)
 ぞす (牡)
 さましか (小牡鹿)
 め (夫婦)
 ぞ (緒)

ぞ (緒) ぞとこ (男)
 ぞのこ (男)
 ぞと (夫)
 ますら (丈夫)
 みやび (風流男)
 さつ (獵夫)
 ぞ (甥)
 ぞ (雄々し)
 ぞす (牡)
 さましか (小牡鹿)
 め (夫婦)
 ぞ (緒)

ぞ (緒) ぞとこ (男)
 ぞのこ (男)
 ぞと (夫)
 ますら (丈夫)
 みやび (風流男)
 さつ (獵夫)
 ぞ (甥)
 ぞ (雄々し)
 ぞす (牡)
 さましか (小牡鹿)
 め (夫婦)
 ぞ (緒)

いさむし(續一勳)
 ばせむ(芭蕉)
 みさむ(徐)
 やま(徐)
 たま(手弱女)
 をとり(囀)
 をかす(犯す)
 をがむ(拜む)
 をどす(威す)
 をす(食す)
 をさむ(治む)
 をさむ(納む)
 をさむ(蔵む)
 をしむ(借しむ)
 をしむ(教ふ)
 をふ(終ふ)
 をはる(終る)
 をめく(叫く)
 をのく(戦く)
 をどる(踊る一躍、踊)
 をる(居る)
 あむく(仰く)
 かざる(香る一薫)
 まます(申す)
 しをる(撓る)
 をかし(可笑し)
 をし(愛し一惜)
 くち(口惜)
 をさなし(幼し)

さむ(竿)
 つり(釣竿)
 みさむ(水竿一棹)
 うま(魚)
 いま(水魚)
 ひま(水魚)
 しらむ(白魚)
 いそめ(魚の目一賊)
 かつ(鯉)
 右の外、上には「お」を用ひ、中下には「ほ」を用ひる。例へば
 親 沖 弟 鬼 祖父 孫
 遅く 恐し等
 顔 潮 火の徳(焔)
 水 郡 蟋蟀 透る 滯る
 直し 遠し 通す等
 中下に「ふ」を用ひ、文語では
 轉呼音で「お」と發音するもの
 がある。例へば
 問 思 買 添
 願 貰 拾 習
 訪 沿 乞 扱
 害 違 誘 纏
 事 拂 叶 憂

ち(父)
 おほち(祖父)
 をち(伯父一叔父)
 ちち(祖父)
 ちち(老翁)
 ちちむ(小父)
 すち(筋)
 うち(氏)
 ち(路)
 こうち(小路)
 ひち(肘)
 あち(味)
 あち(鏝)
 かち(棍)
 かち(楮)
 かち(楮)
 かち(鍛冶)
 ひち(泥)
 ふち(藤)
 ふち(藤)
 ふち(藤)
 かうち(藤)
 かうち(藤)
 ことち(琴柱)

ねち(鏝)
 わらち(草鞋)
 なんち(汝)
 なめち(蝸)
 もみち(紅葉)
 はち(耻)
 あちな(蒲公英)
 みそち(紫陽花)
 よそち(四十)
 いそち(五十)
 むそち(六十)
 かちめ(摺布)
 ちちむ(摺布)
 ちちむ(摺布)
 ちちむ(摺布)
 とち(閉ぢる)
 とち(綴ぢる)
 はち(耻ぢる)
 よち(攀ぢる)
 ひち(濡ぢる一泥)
 もち(振ぢる)
 ねち(俵ぢる)
 あち(味)
 「ち」を用ひるのは右の語だけで、他は「じ」を用ひる。例へば
 虹 雉 籤 躑躅 交る
 詰る 辱し 著し等

ず (つ)

かす(敷)
 きす(傷)
 くす(葛)
 はす(筈)
 ゆはす(弭)
 もす(鴨一舌鳥)
 みす(蚯蚓)
 はす(機)
 ねす(鼠)
 あんす(杏)
 すす(鈴)
 すす(錫)
 すすむ(鈴蟲)
 すす(鱸)
 すす(菘)
 すす(大根)
 すす(雀)
 すす(生絹)
 すす(漫)
 すす(數珠)
 すす(從者)
 すはえ(條)
 いしす(礎)
 くす(國栖)
 こす(梢)
 かならず(必ず)
 たたず(佇む)

なす(準)
 ひす(歪む)
 すす(涼し)
 すす(視)
 ます(交す一混)
 ゆす(袖子)
 右の他は「づ」を用ひる。例へば
 水 屑 泉 雷 酸漿 渦
 煩 貧 續 かす
 らふ等

藤系
 人人は萬物の尺段なり。

修道中學校生徒小冊

修道中學校

廣島市

小冊

小冊

小冊

小冊

大正十四年二月十二日印刷
 昭和十四年二月十二日印刷
 昭和十五年三月十八日印刷
 昭和十六年八月十八日印刷
 昭和十七年十二月十三日印刷
 昭和十八年十二月十六日印刷

定價 卷一—卷九金六拾錢
 卷十—金五拾五錢

帝國讀本改訂新制版

編者	芳賀矢一
訂補者	上田萬平
同行者	長谷川福平
發行者	會社 富山房 東京市神田區神保町一丁目三番地
代表者	坂本嘉治馬
印刷所	東京印刷株式會社 東京市深川區白河町四丁目一番地

發行所

會社 富山房

富山房

東京市神田區神保町一丁目三番地
 電話神田三七一—二七七八番振替口座東京五〇一番



千早子

おたけ

神の代より

日の本

國の

立派な山

廣島市



示本乙